

寝屋川市

# 太秦遺跡・太秦古墳群 I

主要地方道枚方富田林泉佐野線（都市計画道路国守黒原線）道路改良事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書

財団法人 大阪府文化財センター

# 序 文

第二京阪道路の建設により、大阪府東部の丘陵がしだいに姿を変えつつあります。そして、その変貌の一瞬、私たちはここに営まれた人々の暮らしを垣間見ることができます。

当センターは第二京阪道路及び大阪北道路の建設に先立って発掘調査を行い、枚方市から交野市を経て寝屋川市東部に続く丘陵地帯では土地利用と生活の関わり、そして以西の門真市に至る低湿地では環境変化とそれに翻弄されつつも対処してきた人々の姿を明らかにしてまいりました。しかし、総延長十数キロに及ぶ路線の調査とはいえ、幅員は80m余りであり、歩いて1～2分で通過できる範囲でしかありません。したがって、たとえば集落や墓域の広がりなど周辺の状況は推定にとどまらざるを得ません。

本書は、第二京阪道路と交わる大阪府都市計画道路建設に伴う太秦遺跡・太秦古墳群の調査成果を報告するものです。調査地は第二京阪道路から100mばかり北にあたります。同遺跡は従前の調査により、遺跡の東寄りでは5世紀代の古墳群、西寄りでは弥生時代中期の竪穴住居群をそれぞれ主とする各時期の遺構を発見しています。今回の調査地は西寄りの部分になることから、弥生時代の遺構が続いていることが想定されていました。その結果は、予想どおりの弥生時代竪穴住居の発見のほか、しだいに弥生時代の遺構が疎になること、そして尾根縁辺に6世紀の古墳が存在したことなど新知見を得ました。従前の成果だけでは予想できなかったことです。

もちろん、本調査の成果をもって弥生時代集落の縁辺を確認したとは断言しません。6世紀代の古墳群が存在したとも言える状況ではありません。しかし、さまざまな開発行為に伴い今後も実施されるであろう本遺跡の調査に、新たな視座を提供できたものと思っております。

最後になりましたが、大阪府枚方土木事務所をはじめとする関係各位には、円滑な調査の遂行にご協力を賜りましたこと御礼申し上げます。また、静かな住宅地に重機の音を響かせ、ご迷惑をおかけいたしました地元国守町の皆様にご心よりお詫び申し上げますとともに、ご理解を賜りましたこと感謝申し上げます。

2005年2月

財団法人 大阪府文化財センター  
理事長 水野正好

# 例 言

1. 本書は大阪府寝屋川市国守町に所在する太秦遺跡・太秦古墳群の発掘調査報告書である。
2. 調査は大阪府枚方土木事務所から財団法人大阪府文化財センターが主要地方道枚方富田林泉佐野線（都市計画道路国守黒原線）道路改良事業に伴う太秦遺跡（太秦古墳群）発掘調査として平成16（2004）年4月1日～平成17（2005）年2月28日までの間委託を受け、平成16（2004）年4月28日～平成16（2004）年8月20日まで調査を行い、調査と並行して遺物整理作業を行い、平成17（2005）年2月28日本書刊行を以て完了した。
3. 調査は以下の体制で実施した。  
調査部長 玉井功、京阪調査事務所所長 渡邊昌宏、調査第一係長 宮野淳一、主査 大樂康宏、主査 上野貞子〔写真〕 調整課課長 赤木克視、係長 森屋直樹、主査 山上弘、技師 信田真美世
4. 調査の実施にあたっては大阪府枚方土木事務所、地元国守町自治会の方々にご協力をいただいた。
5. 本書の作成は大樂康宏があたった。
6. 本調査に係わる写真・実測図などの記録類は、財団法人大阪府文化財センターにおいて保管している。広く利用されることを希望する。

# 凡 例

1. 遺構実測図の基準高は東京湾平均海水位（T.P.）を用いた。本書挿図中の基準高はすべてT.P.+48.000mである。
2. 遺構平面図の座標数値は世界測地系（測地成果2000）座標系第Ⅵ系で表記している。
3. 遺構平面図等に付した方位針は座標北を示す。
4. 現地調査、遺物整理作業は財団法人大阪府文化財センター『遺跡調査基本マニュアル』に準拠して行った。
5. 土層断面図の土色は小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帳』2003年版 農林水産省農林水産技術会議事務局監修・財団法人日本色彩研究所色票監修に準拠した。
6. 遺構番号は検出順である。今回報告で取り上げた遺構には遺構番号の後にその種類を付した。なお、複数の遺構の集合体である遺構に対しては別途の遺構番号を付した。  
竪穴住居跡 1・2・3、方形周溝墓 1、古墳 1・2
7. 遺構平面図の縮尺は200分の1・100分の1・40分の1、遺構断面図は40分の1・50分の1、調査区土層断面図は50分の1である。遺物実測図は土器が4分の1、石器が4分の3である。図ごとにスケールを表示している。

# 目 次

序文

例言

凡例

第1章 経 過 .....	1
第1節 調査の経過 .....	1
第2節 発掘調査の経過 .....	1
第3節 整理等作業の経過 .....	1
第2章 遺跡の位置と環境 .....	2
第1節 地理的環境 .....	2
第2節 歴史的環境 .....	2
第3章 調査の方法と成果 .....	4
第1節 調査の方法 .....	4
第2節 層序 .....	6
第3節 遺構 .....	12
第4節 遺物 .....	21
第4章 総 括 .....	26

報告書抄録

# 挿 図 目 次

図 1	調査地位置図	2
図 2	調査区と隣接する遺跡	3
図 3	調査区配置図	4
図 4	地区割り図	5
図 5	2区 調査区北西壁 断面図	7
図 6	1区 調査区北東壁 断面図	8
図 7	2区 調査区北東壁 断面図	9
図 8	1区 調査区全体平面図	10
図 9	2区 調査区全体平面図	11
図10	1区 2土坑 平面・断面図	12
図11	1区 533土坑 断面図	12
図12	1区 周溝墓1 (513溝) 断面図	13
図13	1区 周溝墓1 (513溝)・511溝他 平面図	13
図14	1区 古墳1 (3溝) 平面・コンター図	14
図15	1区 古墳1 (3溝) 断面図	15
図16	1区 古墳2 (4溝) 断面図	15
図17	1区 古墳2 (4溝) 平面・コンター図	16
図18	1区 511溝 断面図	16
図19	1区 608土坑 断面図	17
図20	2区 竪穴住居跡1 断面図	17
図21	2区 竪穴住居跡1・2 220土坑他 平面図	18
図22	2区 竪穴住居跡2 断面図	18
図23	2区 220土坑 断面図	19
図24	2区 竪穴住居跡3 197溝 1土坑他 平面図	19
図25	2区 竪穴住居跡3 断面図	20
図26	2区 197溝 断面図	20
図27	2区 1土坑 断面図	21
図28	1区 2土坑 出土遺物	22
図29	1区 周溝墓1 出土遺物	22
図30	1区 16溝 出土遺物	23
図31	1区 古墳1・2 出土遺物	23
図32	1区 511溝 出土遺物	23
図33	2区 220土坑 出土遺物	24
図34	2区 竪穴住居跡1 出土遺物	24
図35	出土遺物 石器 (1)	24
図36	出土遺物 石器 (2)	25

# 写真図版目次

- 写真図版 1 1. 調査地周辺航空写真（南から）  
2. 調査区航空写真（南から）
- 写真図版 2 1. 1 - 1 区全景（北西から）  
2. 1 - 1 区全景（南東から）
- 写真図版 3 1. 古墳 1（3 溝）  
2. 古墳 2（4 溝）・2 土坑
- 写真図版 4 1. 1 - 2 区全景（北西から）  
2. 2 土坑  
3. 古墳 2 周溝断面  
4. 古墳 1 周溝断面 1  
5. 古墳 1 周溝断面 2
- 写真図版 5 1. 2 区全景（南東から）  
2. 2 区北半（東から）
- 写真図版 6 1. 2 区南半（北から）  
2. 竪穴住居跡 1  
3. 竪穴住居跡 1・2  
4. 竪穴住居跡 3  
5. 140ピット
- 写真図版 7 出土遺物 2 土坑
- 写真図版 8 出土遺物 周溝墓 1
- 写真図版 9 出土遺物 周溝墓 1、竪穴住居跡 1、220土坑、16溝
- 写真図版10 出土遺物 古墳 1・2
- 写真図版11 出土遺物 511溝、140ピット、1土坑
- 写真図版12 出土遺物 石器

# 第1章 経過

## 第1節 調査の経過

大阪府により主要地方道枚方富田林泉佐野線（都市計画道路国守黒原線）改良事業として現在進められている寝屋川市梅が丘2丁目から同大字太秦までの道路建設区間の内、大阪府枚方土木事務所の依頼を受けた大阪府教育委員会文化財保護課が取得された建設用地を対象として、事前の試掘調査を平成15（2003）年9月1日～同9月10日に実施した。その結果、計画路線の一部で遺物包含層が検出され、遺物包含層を除去した面において弥生時代の溝・ピットが検出された。それ以外は全面に産業廃棄物が堆積しており遺構・遺物は認められなかった。このことにより発掘調査が必要とされた部分が今回調査地・太秦遺跡（太秦古墳群・その3）である。なお、要調査箇所が周知の遺跡の範囲外であったため範囲の拡大がなされており、調査地は現在、すべて周知の太秦遺跡・太秦古墳群の範囲内である。

## 第2節 発掘作業の経過

発掘調査は大阪府教育委員会の指示を受けて、大阪府枚方土木事務所からの委託により財団法人大阪府文化財センターが実施した。大阪府教育委員会文化財保護課の指導の下、現地での調査は平成16（2004）年4月28日から開始し平成16（2004）年8月20日に終了した。

発掘調査は財団法人大阪府文化財センター京阪調査事務所調査第一係、係長宮野淳一・主査大樂康宏が担当した。現地調査は主に大樂があたった。

現地調査は工事請負方式により掘削作業等を寝屋川市国守町・ヒロ建設に発注し、また、写真測量は株式会社かんこうに委託した。その他、理化学的分析等の委託は行っていない。

発掘作業は、現況測量の後、盛土・旧耕土を機械力により除去し、以下は人力により包含層の掘削、遺構・遺物の精査に努めた。検出した遺構面は、航空機を使用した写真測量により遺構平面図を作成し、また、土層断面図等の作成、記録写真の撮影を併せて行った。現地での調査・記録方法は財団法人大阪府文化財センターの『遺跡調査基本マニュアル』により進めた。調査完了後は掘削土によってすべて埋め戻し原状に復した。

## 第3節 整理等作業の経過

現地での発掘調査が終了した後、ただちに今回調査で出土した遺物等の整理作業を行った。現地調査の担当者が整理作業も併せて担当した。

整理作業は、遺物の洗浄は一部を現地調査詰所で行ったが、現地撤収後財団法人大阪府文化財センター京阪調査事務所で行った。洗浄・注記・登録・接合・実測・製図等を行った。現地で作成した図面、写真等の整理・登録等も併せて行った。

遺物写真撮影等は当センター京阪調査事務所、主査上野貞子が担当した。

遺物実測・保存処理等の委託は行っていない。

## 第2章 遺跡の位置と環境

### 第1節 地理的環境

太秦遺跡・太秦古墳群は大阪府の東北部、淀川左岸に位置する寝屋川市に所在する。寝屋川市域は、西部が旧河内潟に由来する標高2～3mの低平坦地、東部が生駒山地西麓から派生し西方向へ延びる50m前後の丘陵地帯に分類される。この寝屋川東部丘陵地帯のうち、JR片町線（学研都市線）付近から北西方向へ延び、北を打上川の開析谷、南を讃良川に挟まれた頂部平坦面が比較的面積の広い標高50m弱の台地状の丘陵が存在する。この丘陵一帯に太秦遺跡・太秦古墳群は立地している。頂部平坦面が太秦遺跡・太秦古墳群の現在周知されている範囲とほぼ重なる。また、国指定史跡の高宮廃寺跡や第二京阪道路に伴う調査でその様相が明らかになりつつある大尾遺跡や高宮遺跡はこの丘陵の南西側緩斜面に立地する。

この丘陵には近世から続く打上・国守町・太秦・高宮の各集落がのる。一部に山林や田畑が残るが、市街化がかなり進んでいる。大正期には大規模な墓地在り造成された。昭和40年には大阪市水道局豊野浄水場が建設され、府営寝屋川公園なども所在している。

今回調査地は丘陵頂上平坦部の南端付近に位置している。現地目は宅地で、調査範囲中央の市道上でT.P.+48.2mを測る。



図1 調査地位置図

### 第2節 歴史的環境

太秦遺跡・太秦古墳群の周辺には旧石器から古代までの各時代の遺跡が分布している。本遺跡の立地する寝屋川東部丘陵からさらに北東側の枚方丘陵にかけては多くの国府型ナイフ形石器の散布が知られている。縄文時代の遺跡としては、やや離れるが早期の標式遺跡の交野市神宮寺遺跡や枚方市穂谷遺跡があり、中期以降では近隣の寝屋川市讃良川遺跡や四條畷市砂遺跡など大規模な遺跡が存在する。

弥生時代前期の遺跡には寝屋川市高宮八丁遺跡や四條畷市雁屋遺跡があり、高宮八丁遺跡はその消長が太秦遺跡と関連づけて考えられている。中期には太秦遺跡がこの地域の中心的位置を占め、雁屋遺跡や東大阪市中垣内遺跡など他の拠点集落とはやや距離を置く。後期には遺跡は増えるが集落として明確なものは、太秦遺跡から距離を置く枚方丘陵一帯に多く存在する。



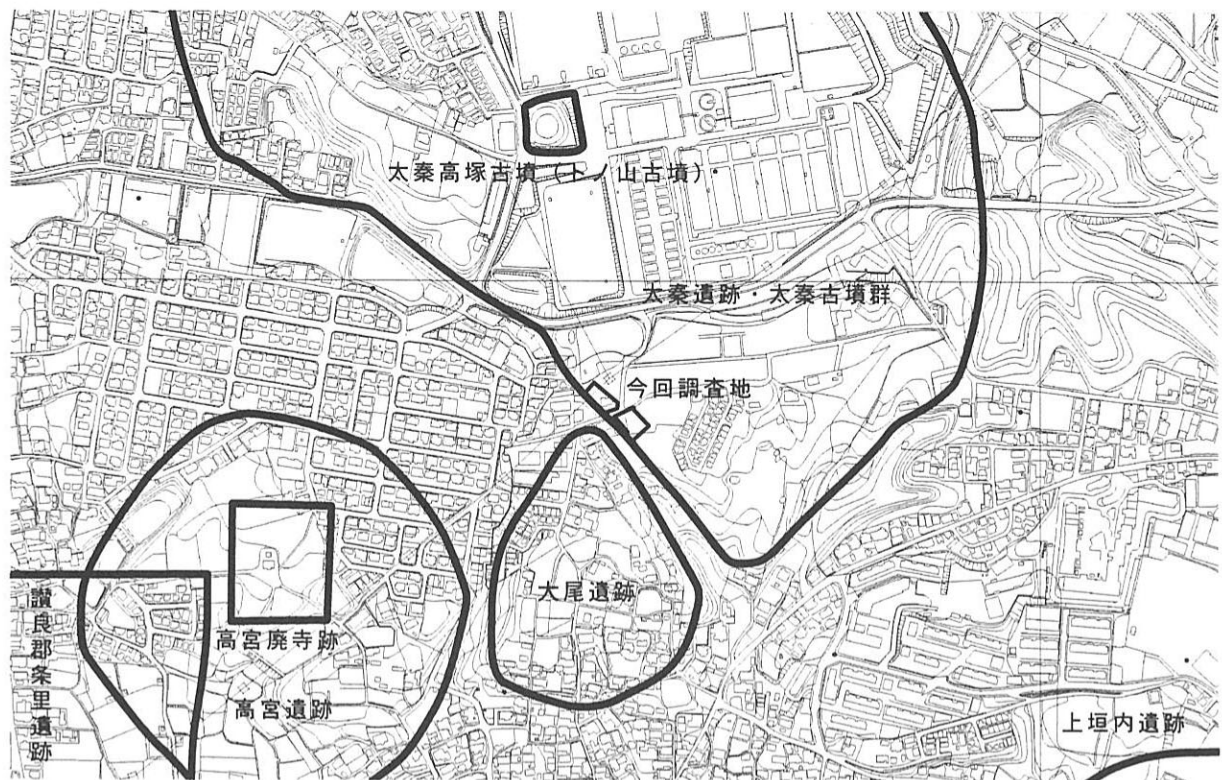


図2 調査区と隣接する遺跡

太秦遺跡は、弥生土器や石槍・大型石鎌が採集され、北河内を代表する弥生時代の遺跡として早くから周知されている。広範囲かつ高地に立地することから考古学上でも著名な遺跡であるが様相はあまり明らかではなかった。しかし、第二京阪道路建設に係る発掘調査で、財団法人大阪府文化財センターが平成15（2003）年度に実施した太秦遺跡の調査では弥生時代中期の竪穴住居跡39棟をはじめ多くの遺構が検出され、あらためて太秦遺跡がこの地域の拠点集落であることが確認された。そして、隣接する大尾遺跡で財団法人大阪府文化財センターが平成13（2001）・平成15（2003）年度に実施した第二京阪道路建設に係る調査では弥生時代中期の方形周溝墓30基以上、竪穴住居跡などが検出されている。

また太秦古墳群も早くからその存在は知られ、採集遺物などから古墳時代後期を中心とした群集墳と考えられていた。個々の古墳の規模や内容はほとんど不明で、浄水場建設等の開発などにより消滅し、寝屋川市指定史跡・太秦高塚古墳をはじめ数基が現存あるいは小字名にその存在を知るのみである。しかし、やはり同センターが実施した第二京阪道路建設に係る平成13（2001）・平成15（2003）年度の発掘調査で、方墳を主とした25基もの小規模古墳の群集が確認された。「尾支群」と命名されたこのグループは5世紀後半を中心とする木棺直葬を主体とし、太秦古墳群の様相の一部が判明した。

太秦古墳群周辺の古墳としては前期の交野市森古墳群や府指定史跡・四條畷市忍岡古墳、中期の府指定史跡・交野市東車塚古墳などの前方後円墳、中期以降の群集墳として寝屋川市打上古墳群、四條畷市更良岡山古墳群が近接する。そして国指定史跡寝屋川市石宝殿古墳は横口式石槨をもつ終末期古墳である。飛鳥時代以降は、国指定史跡・寝屋川市高宮廃寺跡とそれを取り巻くように存在する寝屋川市高宮遺跡が太秦遺跡に隣接する。また、寝屋川市太秦廃寺跡、寝屋川市・四條畷市讚良寺跡、四條畷市正法寺跡など白鳳期創建とされる寺院跡が点在する。

## 第3章 調査の方法と成果

### 第1節 調査の方法

今回の調査区は、先に試掘調査を実施した大阪府教育委員会により発掘調査が必要と判断されて、財団法人大阪府文化財センターが大阪府教育委員会から指示を受けた範囲の内、実際の計画道路幅員・形状にあわせて設定した。中央部分の市道は今回調査範囲から除外した。このため市道を境に2調査区に分割し、それぞれ北西側を1区・南東側を2区と呼称して調査を実施した。調査面積は1区が616㎡、2区が659㎡、合計は1,275㎡である。

なお、掘削土仮置スペースの関係から1区をほぼ中央で反転して調査を行ったため、さらに北西半を1-1区、南東半を1-2区に二分した。従って遺物の登録番号、現場での図面番号は3調査区として

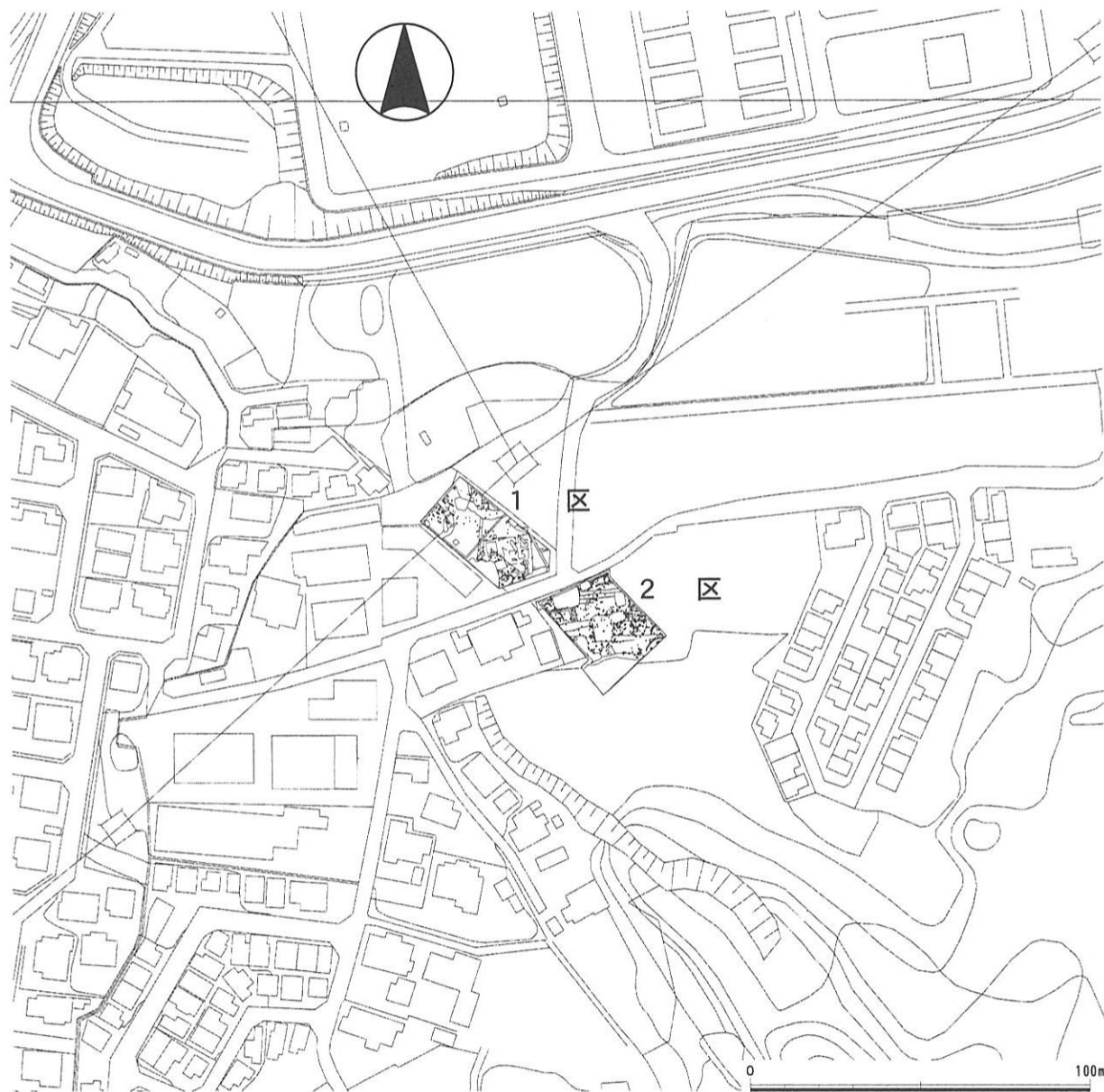


図3 調査区配置図

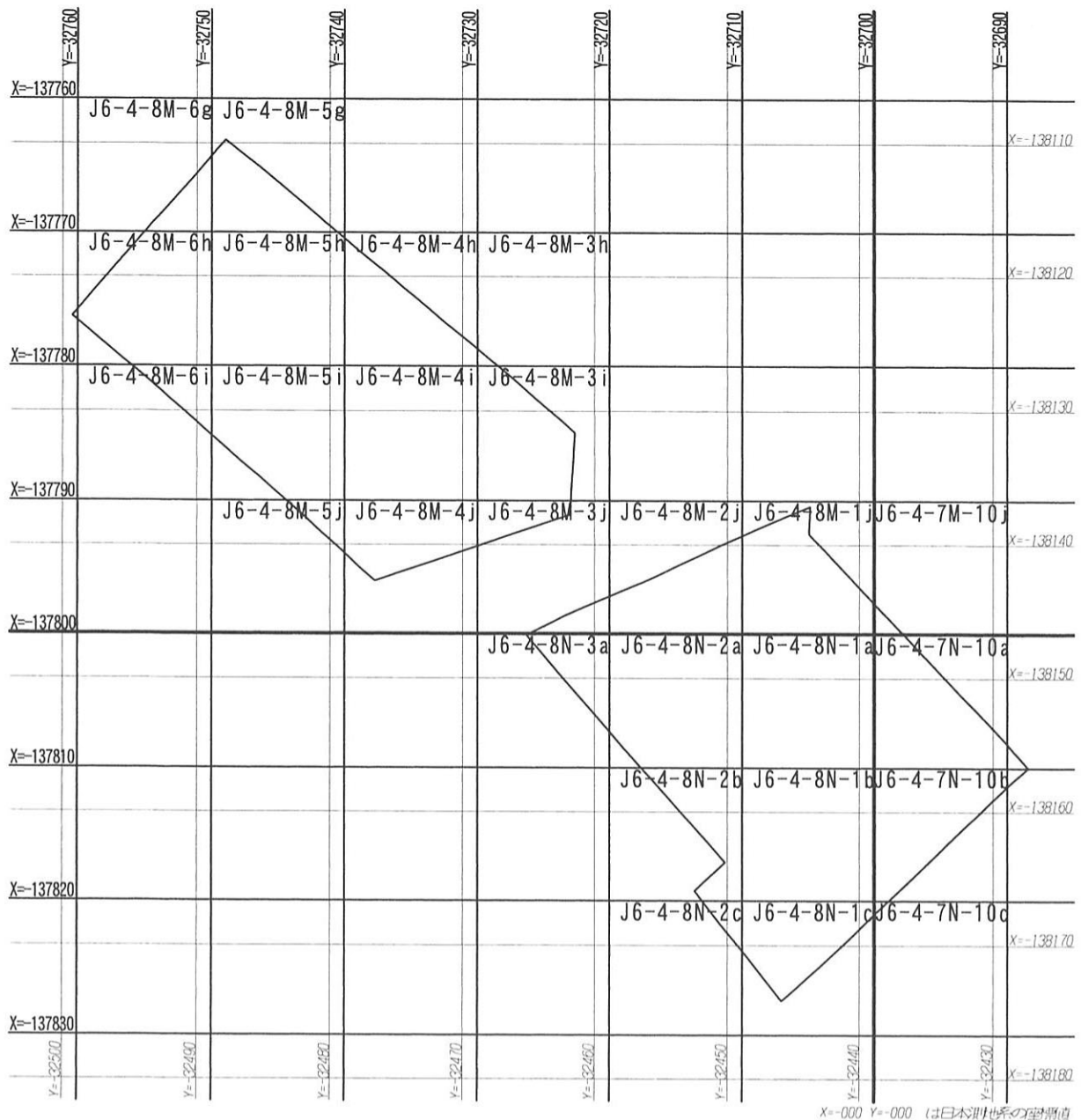


図4 地区割り図

分別されている。今回報告では写真図版以外には特に区別していない。

調査区の地区割りは財団法人大阪府文化財センター『遺跡調査基本マニュアル』2003年に準拠し、出土遺物の取り上げ単位・土層観察セクションの設定・遺構実測図面、撮影写真時の位置記録に用いた。また、現況測量・掘削土量検測の基準にも使用した。

地区割りは次のとおり行った。

地区割りの基準線には国土座標軸（世界測地系）第VI座標系にもとづく数値を使用した。区割りは大から小へと計6段階で行い、府全域を共通の地区割りで統一する。

第I区画：大阪府の南西端  $X = -192000\text{m}$ ・ $Y = -88000\text{m}$ を基準とし、縦6 km、横8 kmで区画する。表示は縦軸A～O、横軸0～8で表示。表示方法は縦・横の順。

第Ⅱ区画：第Ⅰ区画を縦 1.5km、横 2.0kmでそれぞれ4分割し、計16区画を設定。南西端を1とし、東へ4まで、あとは西端を5、9、13、北東端を16とする平行式の地区名表示。

第Ⅲ区画：第Ⅱ区画を100m単位で区画。縦15、横20。表示は北東端を基点に縦A～O、横1～20。表示方法は横・縦の順。

第Ⅳ区画：第Ⅲ区画を10m単位で区画。縦、横各10。表示は北東端を基点にa～j、横1～10。表示方法は横・縦の順。

第Ⅴ区画：第Ⅳ区画内を5m単位で区画。表示は北東側Ⅰ、北西側Ⅱ、南東側Ⅲ、南西側Ⅳ。

第Ⅵ区画：第Ⅳ区画内を、北東端を基点にして西へはW+○m○cm○mm、S+○m○cm○mmと必要な桁まで表示。

#### 表示方法例

第Ⅰ区画	第Ⅱ区画	第Ⅲ区画	第Ⅳ区画	第Ⅴ区画	第Ⅵ区画
J 6	— 4	— 8 N— 1 a	— I	W3.10m	S2.30m

通常、遺物の取り上げなど調査で使用する最低範囲は、第Ⅳ区画とし、必要に応じてその他の範囲を使用した。ラベルの記入など、調査では、第Ⅲ・Ⅳ区画を表示することを原則とした。

## 第2節 層序

今回調査地は前述のとおり丘陵頂部平坦面に当たり、耕作等の削平による地形の改変もかなり進んでいる。このため、遺跡の本来の層序はほとんど遺されていない。調査地の調査直前の地目は宅地で、全面に盛土が行われている。調査区南側の谷は埋め立てられて調査地と同一面となっている部分もある。

調査区全体の現況はほぼ平坦である。調査区中央を走る市道を挟んで北側の1区がほぼT.P.+48.2m、南側の2区がやや高くほぼT.P.+48.5mを測る。

基本層序は盛土、旧耕土、灰オリーブ色砂質土、地山・明黄褐色粘土の順である。

盛土は全体に認められ、0.2～0.6mの厚さである。近年の施工と思われる。

旧耕土は宅地化以前は耕作地おそらくは畑地であったことを示す。盛土施工時に削平除去されたのか、部分的に厚さ0.2m程度遺存している。

灰オリーブ色砂質土は旧耕土の直下層（ただし、2区の南西側には間層としてにぶい黄色砂礫混じり土が入る。）である。締まりはあまり良くない。近世以前の耕作土と思われる。弥生土器・サヌカイト片・須恵器・土師器・瓦器・陶器の細片を包含する。

地山は調査区全域ほぼ同一層で、水分を増すと強い粘性をもつ明黄褐色粘土層である。2区の一部に下層の礫層がみられる。地山は調査区中央付近が最も高く、ほぼT.P.+48.0mを測り、調査区両端ではT.P.+47.5mをそれぞれ測る。調査地が尾根の頂部に当たり、尾根筋が現市道と重なるものと思われる。

遺構は近世以降の耕作跡を除いてすべて地山面で検出した。

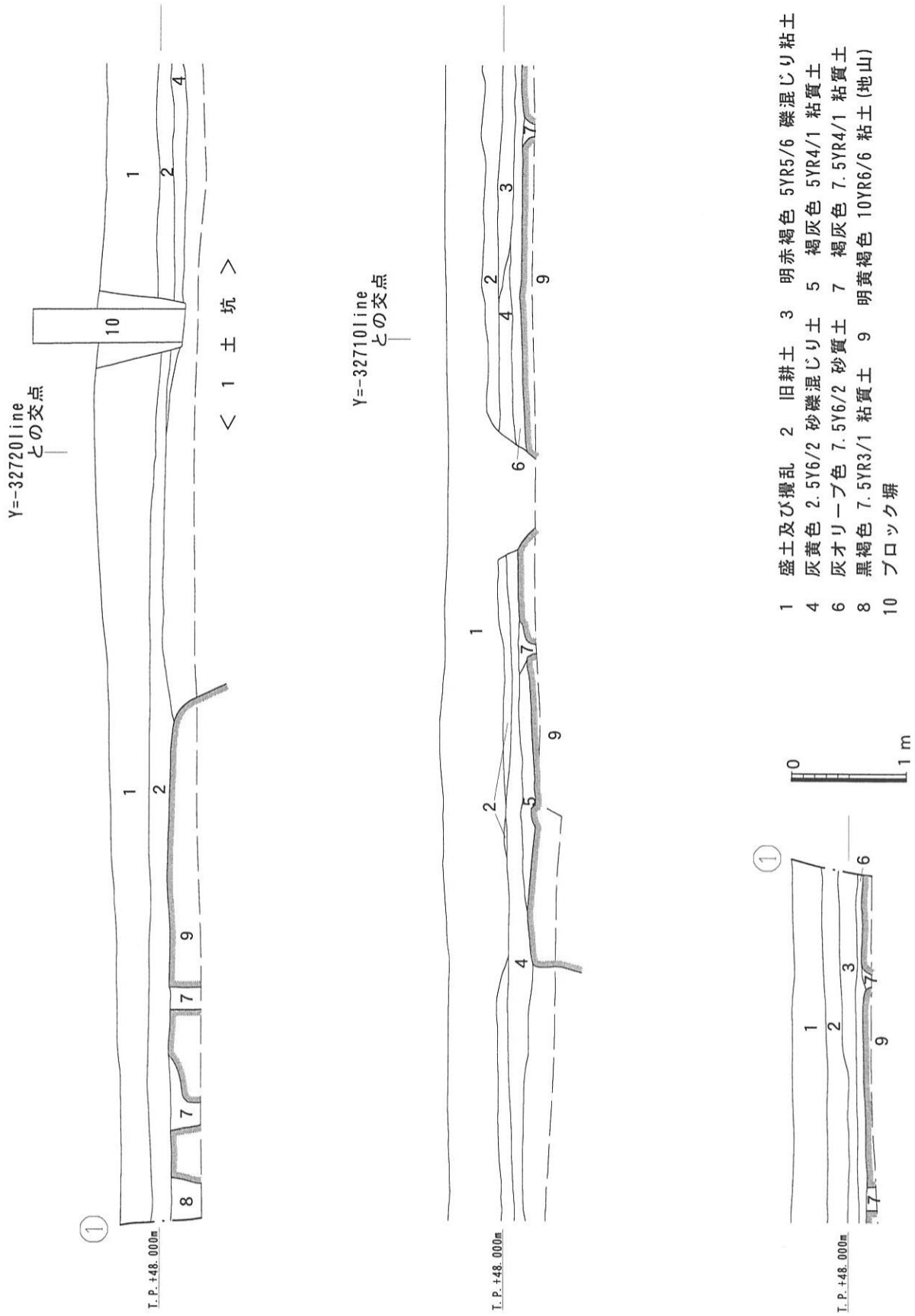


図5 2区 調査区北西壁 断面図

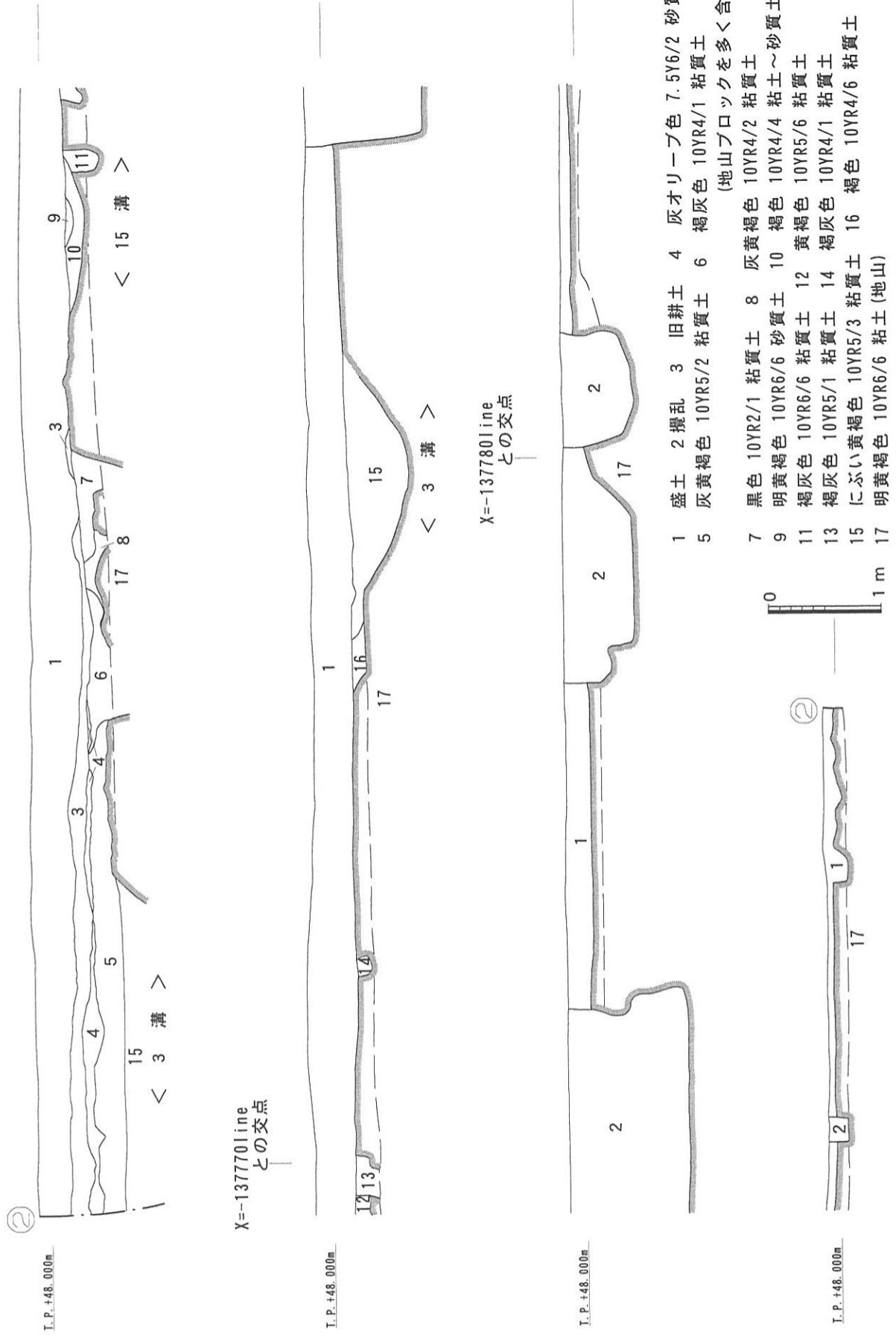
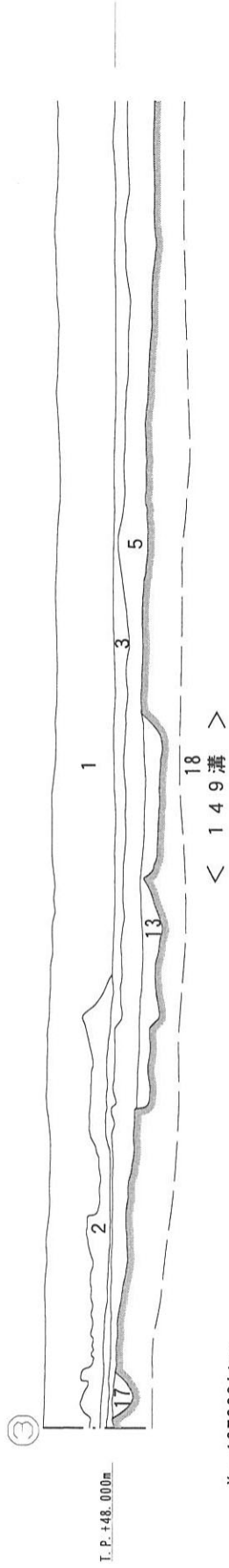
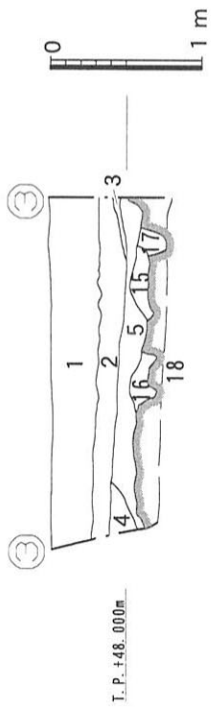
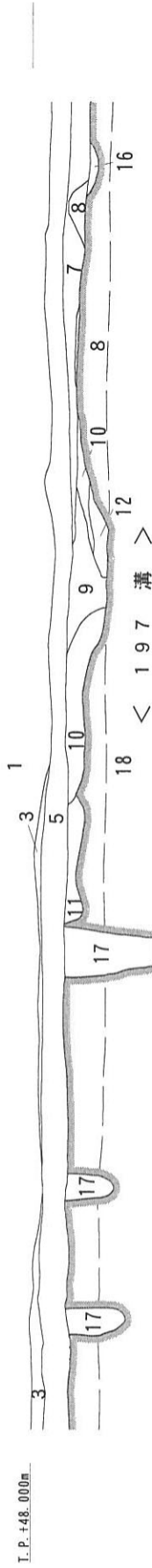


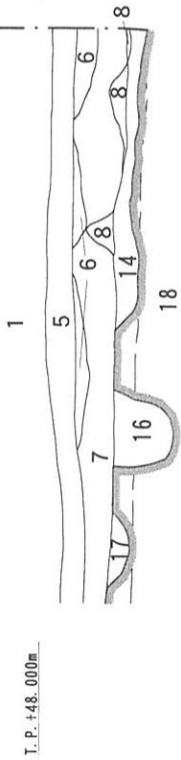
図 6 1 区 調査区北東壁 断面図



X=-137800line  
との交点



X=-137810line  
との交点



- 1 盛土 2 旧耕土 3 にぶい黄色 2.5Y6/4 砂礫混じり土
- 4 明赤褐色 5YR5/6 礫混じり粘土 5 灰オリーブ色 7.5Y6/2 砂質土
- 6 灰黄褐色 10YR6/2 粘質土 7 橙色 7.5YR6/6 粘土混じり土
- 8 灰白色 2.5Y7/1 土 9 明黄褐色 10YR6/8 粘土混じり砂礫
- 10 灰黄色 2.5Y7/2粘質土 11 灰黄色 2.5Y6/2粘質土
- 12 にぶい黄褐色 10YR7/2 砂礫 13 褐灰色 10YR5/1 土
- 14 黄灰色 2.5Y6/1 土 15 灰黄色 2.5Y5/1 粘質土
- 16 褐灰色 7.5YR4/1 粘質土 17 黒褐色 7.5YR3/1 粘質土
- 18 明黄褐色 10YR6/6 粘土(地山)

図7 2区 調査区北東壁 断面図

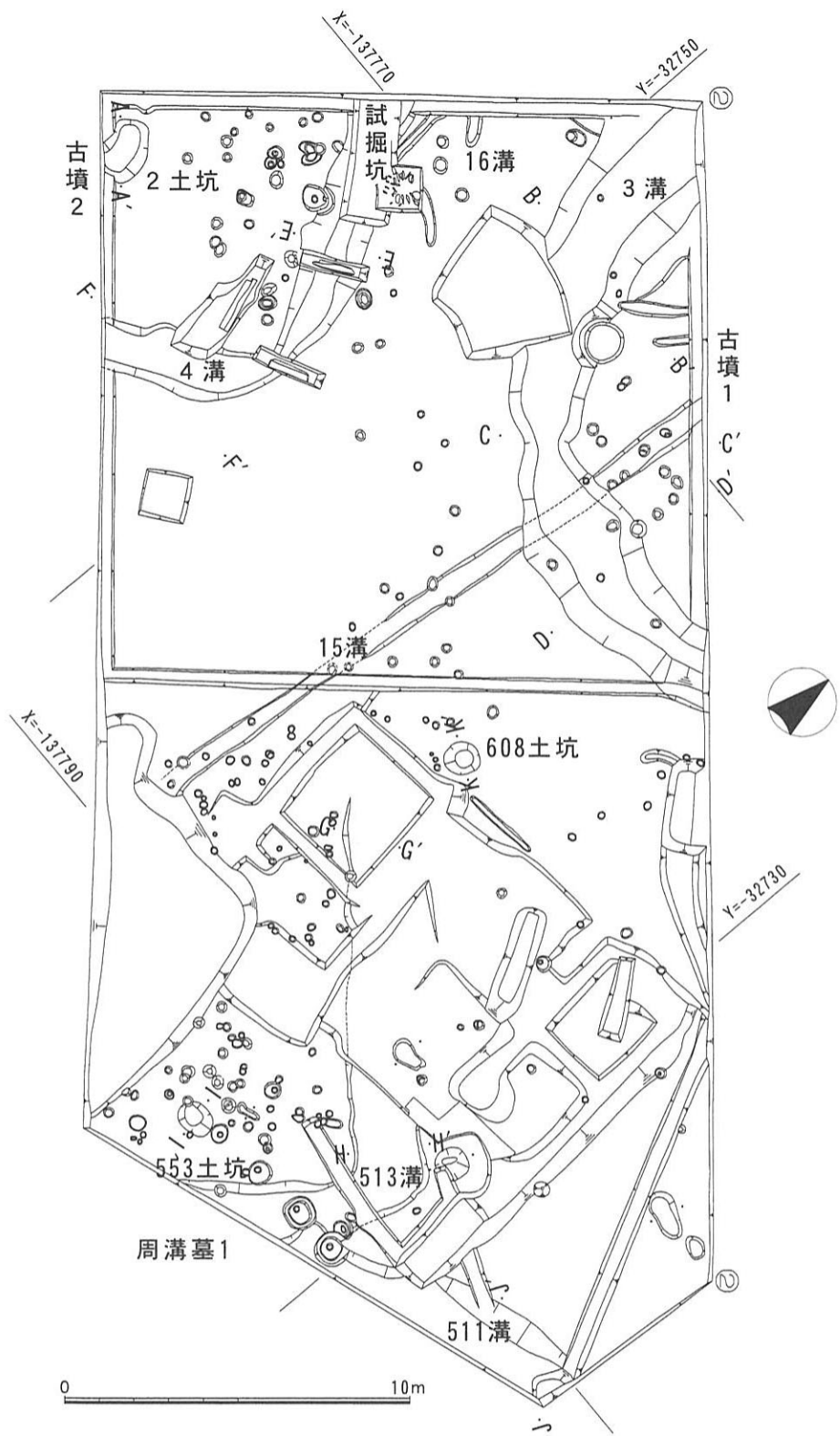


図8 1区 調査区全体平面図



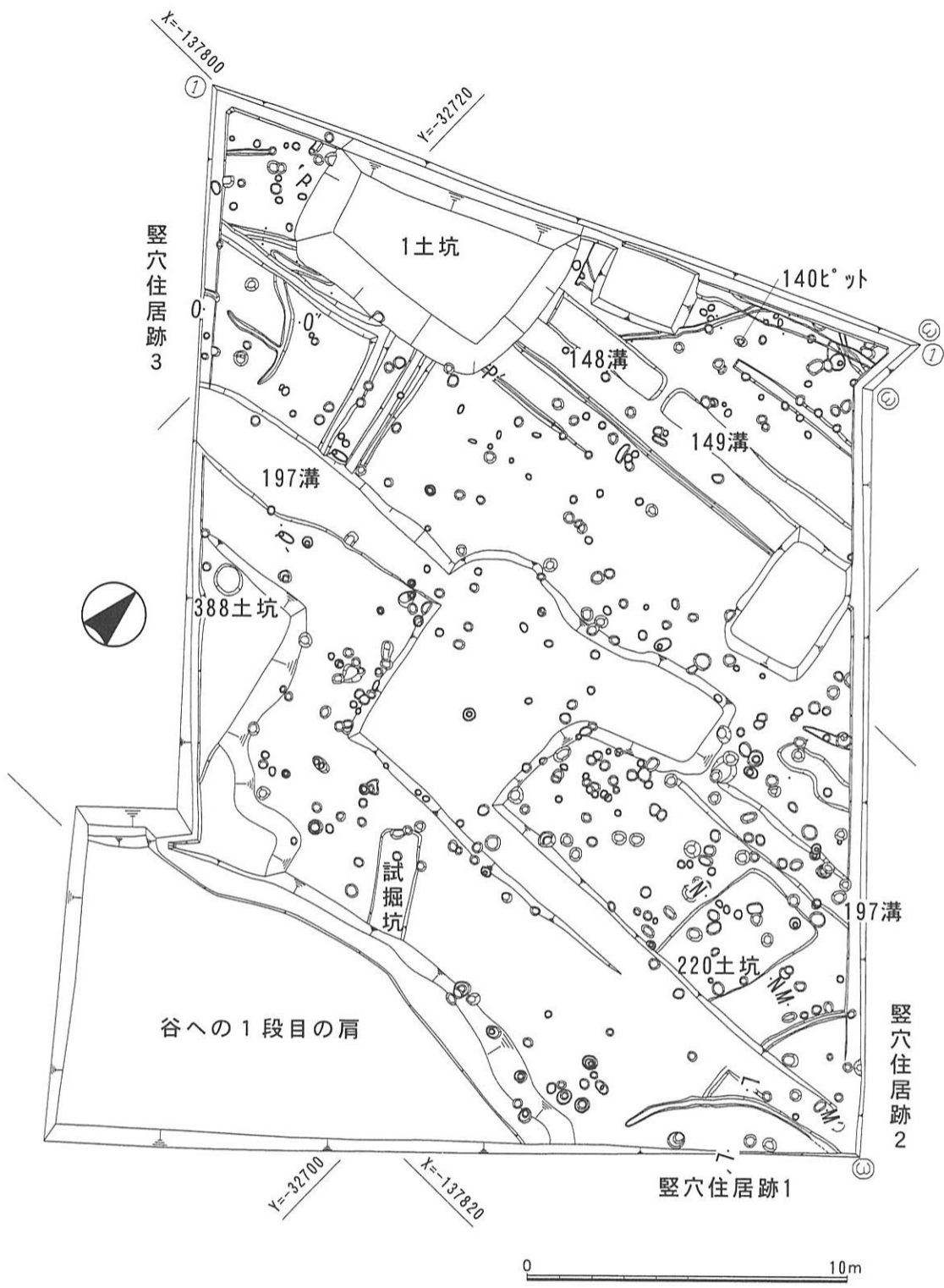


図9 2区 調査区全体平面図

### 第3節 遺構

今回の調査では決して広くない調査面積であるにもかかわらず、弥生時代中期の竪穴住居跡3棟・方形周溝墓1基・土坑・多数のピット、古墳時代後期の方墳あるいは円墳2基、古墳時代～古代の土坑・溝・ピット、近世の土坑・溝などを検出した。遺構総数は600以上にのぼる。

検出した主な遺構は調査区ごとに以下のとおり。

#### 1 区 (図6、8、10～19・写真図版2～4)

##### 2土坑 (図8、10・写真図版3、4)

1区の西隅で検出した。長径1.8m・短径1.4mの平面楕円形の土坑で、一部は調査区外となる。深さは0.5mを測る。

埋土は上層が炭化物を多く含む灰色土、中層が灰褐色粘質土、下層が灰色粘質土となる。遺物は各層から出土したが、下層から弥生土器の把手付鉢・甕・石器等がまとめて出土した。

弥生時代中期後半の遺構である。

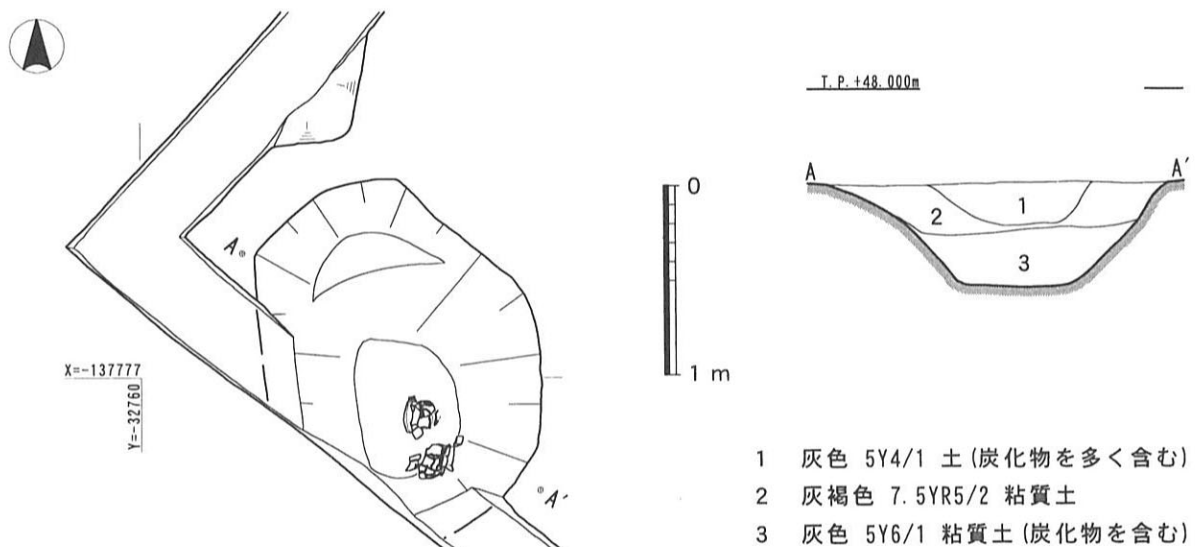


図10 1区 2土坑 平面・断面図

##### 553土坑 (図8、11、13・写真図版4)

1区南西隅付近で検出した。長径1.1m・短径0.8mの平面楕円形の土坑である。深さ0.4mを測る。

灰黄褐色砂混じり土、褐灰色粘質土の順で、褐灰色粘質土から弥生土器の甕等が出土した。

埋土は上層から灰黄褐色粘質土、褐灰色砂礫混じり土、

弥生時代中期後半の遺構である。

##### 周溝墓1 (513溝) (図8、12、13・写真図版4)

1区南東半で検出した。調査区内で直角に曲がる溝であ

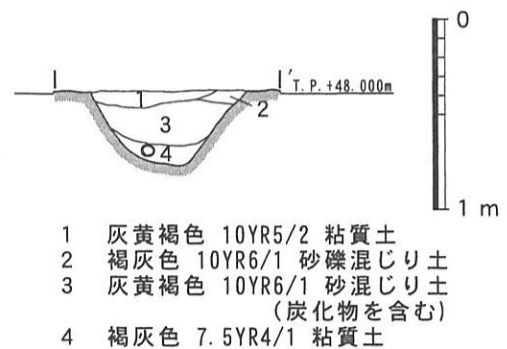
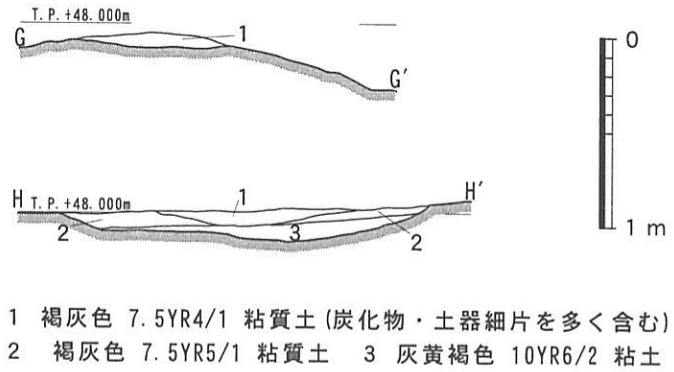


図11 1区 553土坑 断面図

る。北西側は大部分が削平・攪乱されている。南側は市道敷へ延びて調査区外となる。北東辺は内側肩の角から辛うじて周溝の痕跡を11m程追える。一辺10数m以上になる大型の方形周溝墓の残欠と思われる。屈曲部付近の残存部分で最大幅 1.8~ 2.0m・深さ 0.1~ 0.2mを測る。

埋土は上層から、炭化物・土器片を多く含む褐灰色粘質土、褐灰色粘質土、灰黄褐色粘土の順である。屈曲部付近の埋土の主に上層部分から弥生土器の鉢・壺・甕・石器等がまとまって出土した。

弥生時代中期後半の遺構である。



- 1 褐灰色 7.5YR4/1 粘質土 (炭化物・土器細片を多く含む)
- 2 褐灰色 7.5YR5/1 粘質土 3 灰黄褐色 10YR6/2 粘土

図12 1区 周溝墓1 (513溝) 断面図

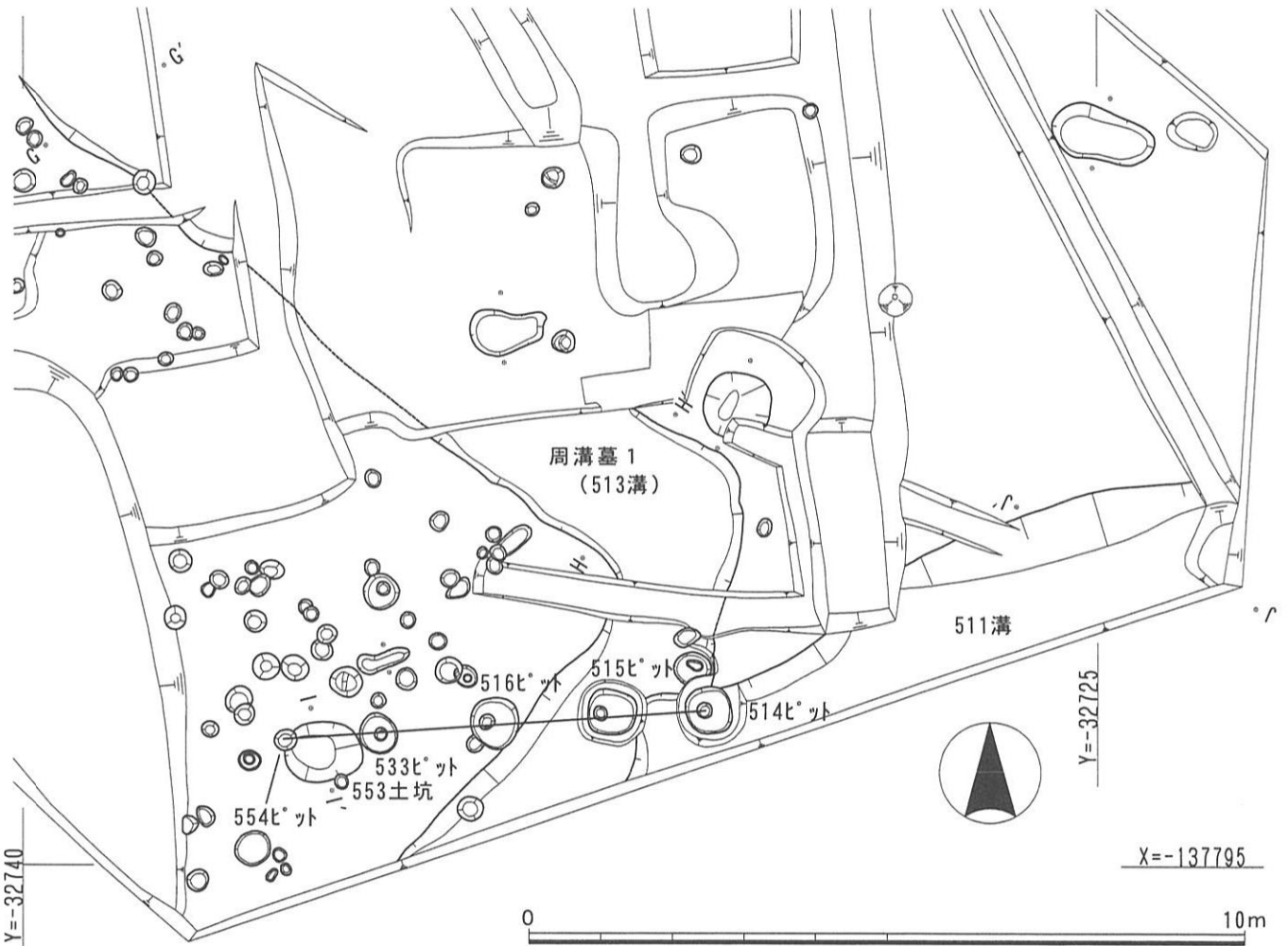


図13 1区 周溝墓1 (513溝)・511溝他 平面図

古墳1 (3溝) (図8、14、15・写真図版2~4)

1区北西側で検出した地山の明黄褐色粘土層を切り込む溝である。大きく弧を描き調査区外へと延びる。調査区北東隅での検出最大幅 3.7m・深さ 0.7m、検出部分半ばの最小幅部分で幅 1.3m・深さ 0.4m

をそれぞれ測る。溝の埋土は、上層がにぶい黄褐色粘質土、中層は褐灰色粘質土・明黄褐色粘土で、最下層に部分的に明黄褐色粘質シルトが堆積する。各層とも比較的締まりが悪い。流水、滞水による堆積層は認められなかった。

遺物は上層のにぶい黄褐色粘質土層から弥生土器・土師器・須恵器が細片を中心に若干出土するのみであった。

溝の内側に向かって地山がわずかに上がる。東半は15溝を境に後世の耕作により削平されており平坦である。墳丘の盛土は確認できなかった。また埋葬主体等も確認されなかった。

平面・断面の形状、出土遺物などから円墳または方墳と思われる。円墳とした場合、外周で直径21m程に復元できる。

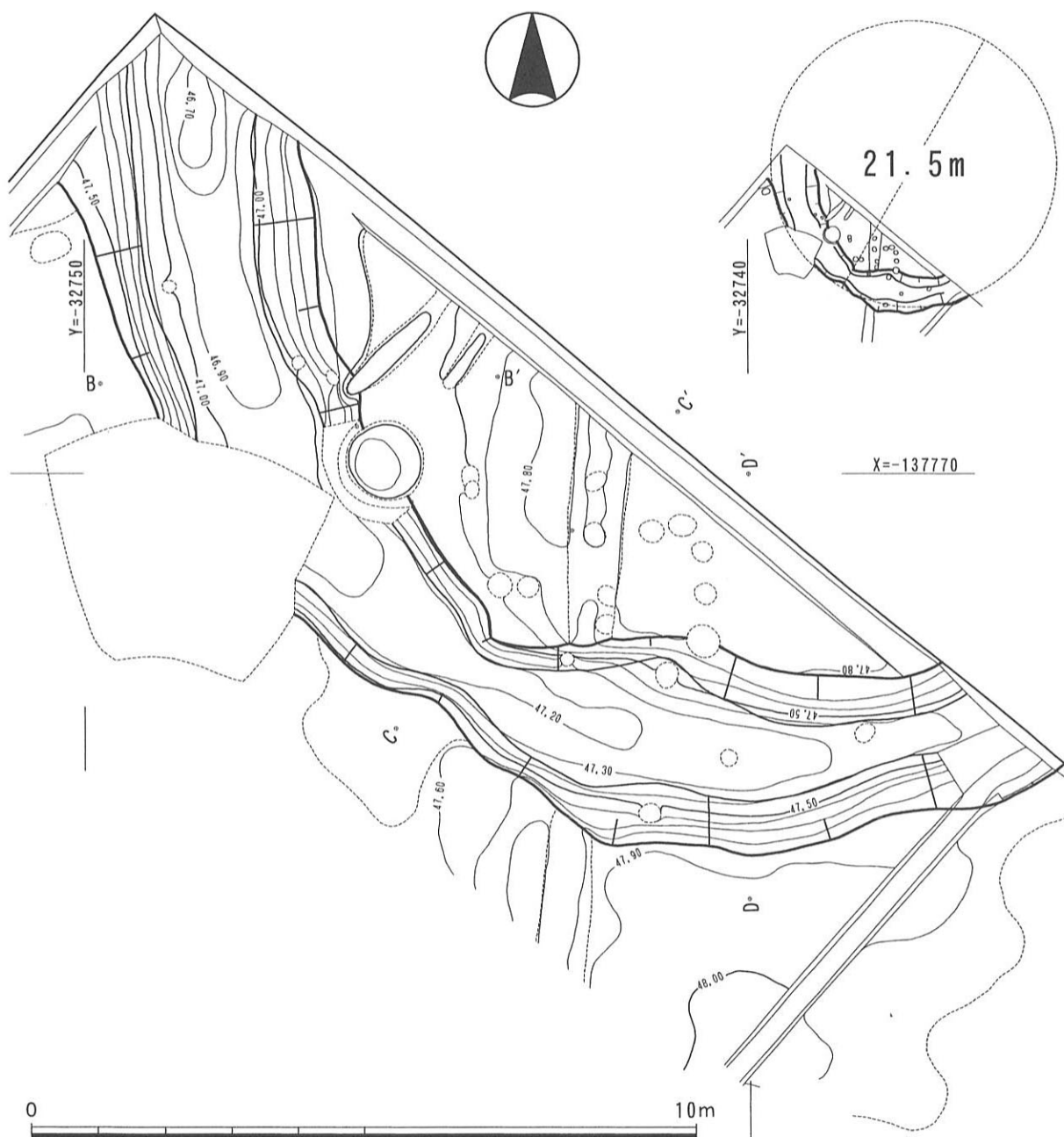


図14 1区 古墳1 (3溝) 平面・コンター図

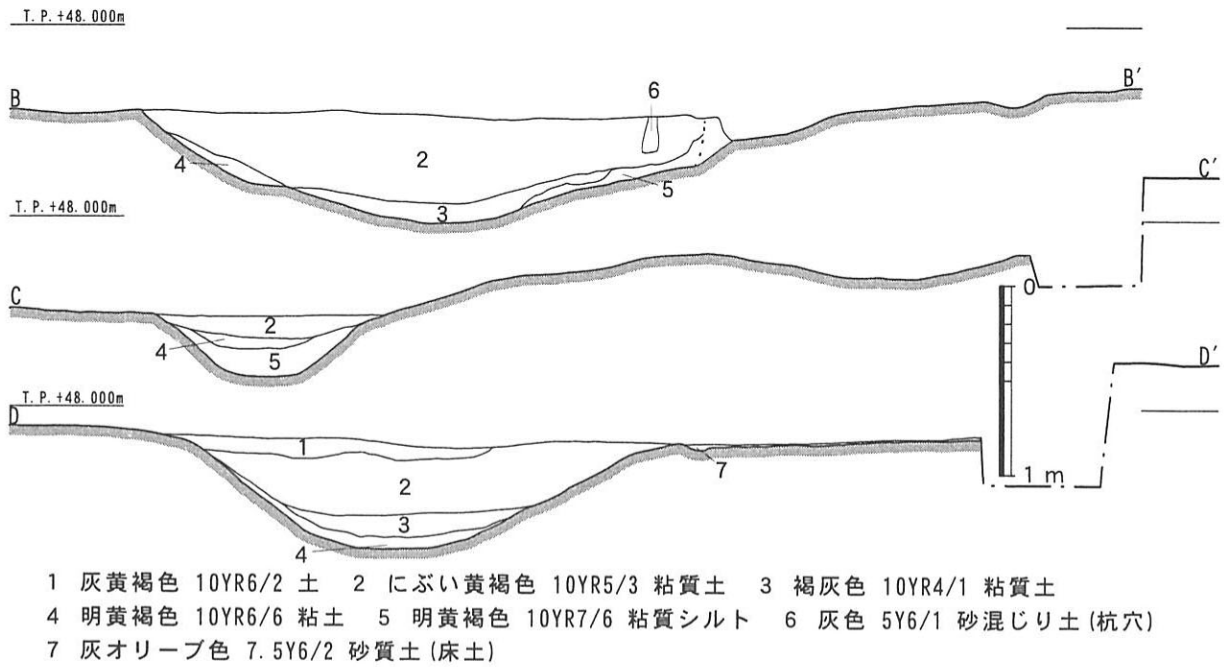


図15 1区 古墳1 (3溝) 断面図

古墳2 (4溝) (図8、16、17・写真図版2～4)

1区北西側で検出した。調査区内でほぼ直角に曲がり調査区外へと延びる。南西壁付近で幅 1.5m・深さ 0.3m、北西壁付近で幅 2.0m・深さ 0.5mを測る。屈曲部分は極端に狭く、幅 0.6m・深さ0.25mを測る。

埋土は上層がにぶい黄褐色粘質土で古墳1 (3溝) の埋土とほぼ同質である。中層がオリーブ黒色粘質土・暗灰黄色粘土で、下層が明黄褐色粘土・にぶい褐色砂混じり粘土である。

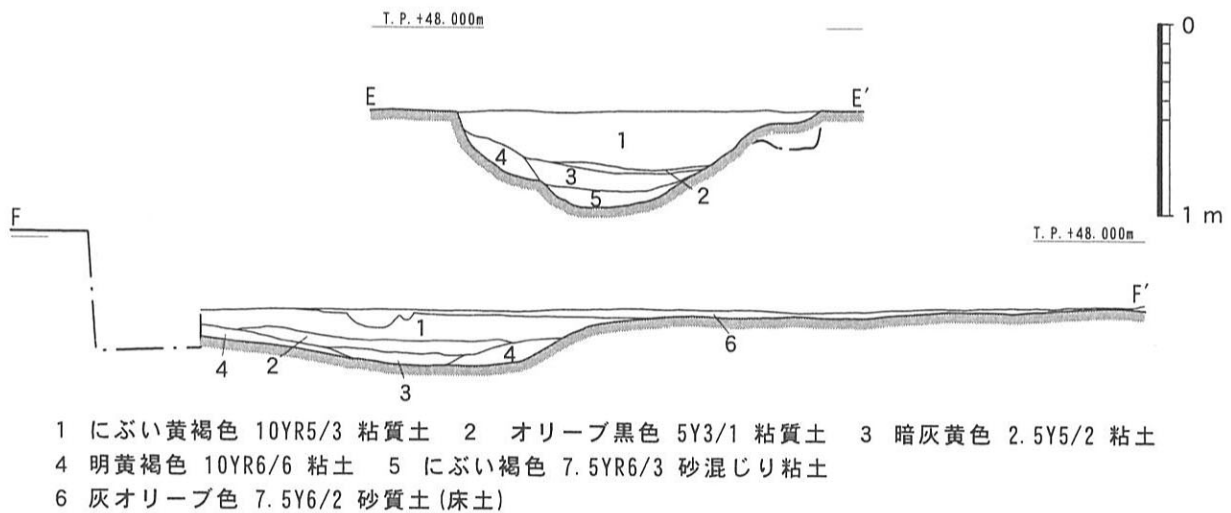


図16 1区 古墳2 (4溝) 断面図

遺物の出土がほとんどなく、上層のにぶい黄褐色粘質土から弥生土器・土師器・須恵器が細片を中心に若干出土したのみである。

溝の内側は後世の耕作による削平を受けておりほぼ平坦である。墳丘の盛土は確認できなかった。

平面・断面の形状、出土遺物などから古墳1（3溝）と同時期の方墳と思われる。一辺10m以上の規模である。

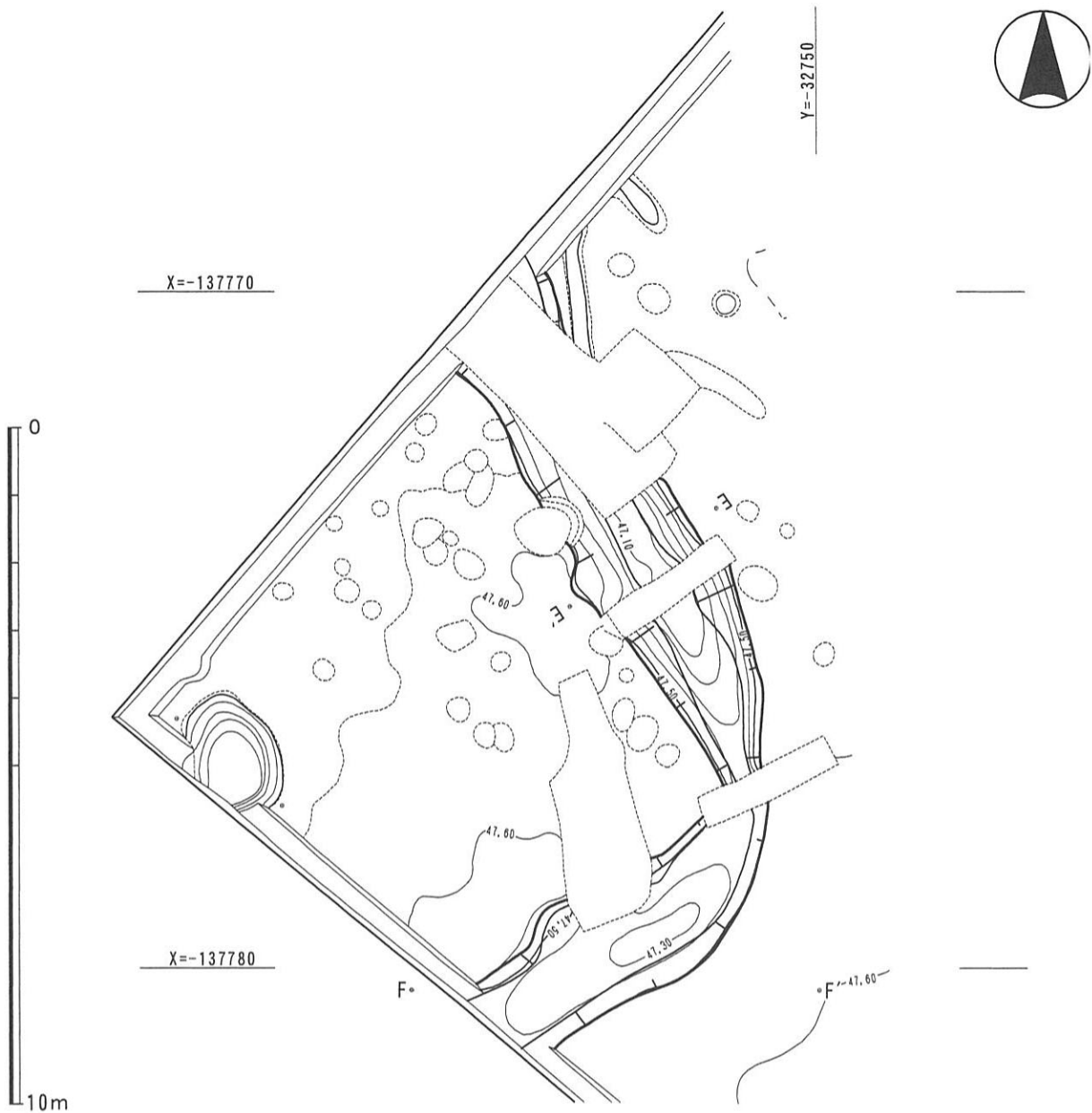


図17 1区 古墳2（4溝） 平面・コンター図

511溝（図8、13、18・写真図版4）

1区南端で北側の肩のみを検出した溝である。周溝墓1（513溝）を切っている。調査区壁際で深さ

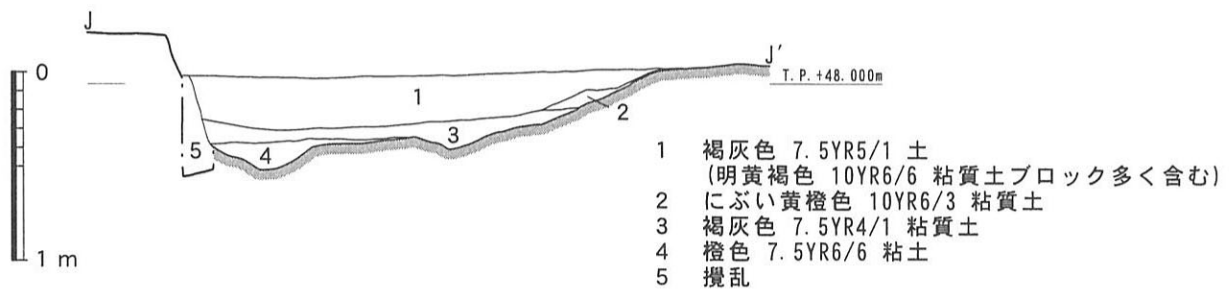


図18 1区 511溝 断面図

0.5mを測る。埋土からは弥生土器・土師器・須恵器が出土した。隣接する2区では検出されず、市道の範囲内に収まる大型土坑の可能性もあるが性格は不明である。

古墳時代後期以降のものと考えたい。

514ピット・515ピット・516ピット・533ピット・554ピット（図8、13・写真図版4）

1区南端で検出した柱穴列である。554ピット以外は直径0.5～0.7mの柱あたりをもつ柱穴である。柱間は約1.5mで4間分のみ検出した。東西棟掘立柱建物の一部と思われるが詳細は不明である。

511溝の埋没後の遺構で、古墳時代後期から古代の遺構と考えたい。

15溝（図8・写真図版2～4）

調査区中央をほぼ南北に走る。幅0.7m前後・深さ0.1～0.2m程度の近世以降の溝で、この溝の東側は遺構面が一段高い。耕作面の段差を表しているものと思われる。埋土からは陶器・磁器の細片が出土した。

近世以降のものと思われる。

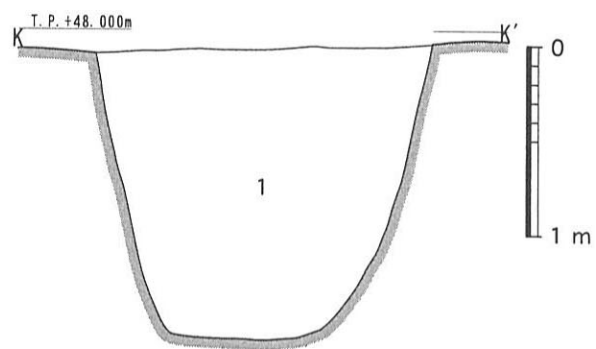
608土坑（図8、19・写真図版4）

調査区中央で検出した。直径1.0m・深さ0.8mの土坑で、素掘の井戸または水溜と思われる。遺物はほとんど出土しなかった。

近世以降のものと思われる。

ピット群（図8・写真図版2、4）

200基弱のピットを検出した。直径0.2～0.4mのものがほとんどである。1区東半と西隅・古墳2付近に集中している。埋土により弥生時代・中世・近世の3時期に分類できる。建物などに復元できるものはなかった。



1 明黄褐色 10YR6/8 粘質土  
(黒褐色 10YR3/2 粘質土ブロック  
・径10～50mm程度を若干含む)

図19 1区 608土坑 断面図

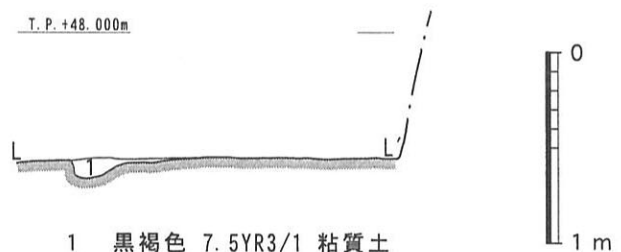
2区（図5、7、9、20～27・写真図版5、6）

竪穴住居跡1（397溝・396ピット・400ピット・401ピット）（図9、20、21・写真図版5、6）

2区東隅で検出した。かなり削平を受けているが、竪穴住居跡と思われる。床面はまったく遺されていない。大半が調査区外となる。残存している壁溝の弧から復元して直径10m程度の円形竪穴住居跡と推測される。

壁溝・397溝は幅約0.2～0.25m・深さ0.02～0.2mである。埋土は黒褐色粘質土で弥生土器の甕・壺・鉢等の細片が出土した。

住居跡の柱穴と思われる396・400・401ピットはいずれも直径0.4m前後・深さ0.4～0.6mのしっかりとしたピットで、埋土は黒褐色粘質土である。



1 黒褐色 7.5YR3/1 粘質土

図20 2区 竪穴住居跡1 断面図

わずかな出土遺物のみでの判断になるが、弥生時代中期後半の遺構と考えられる。

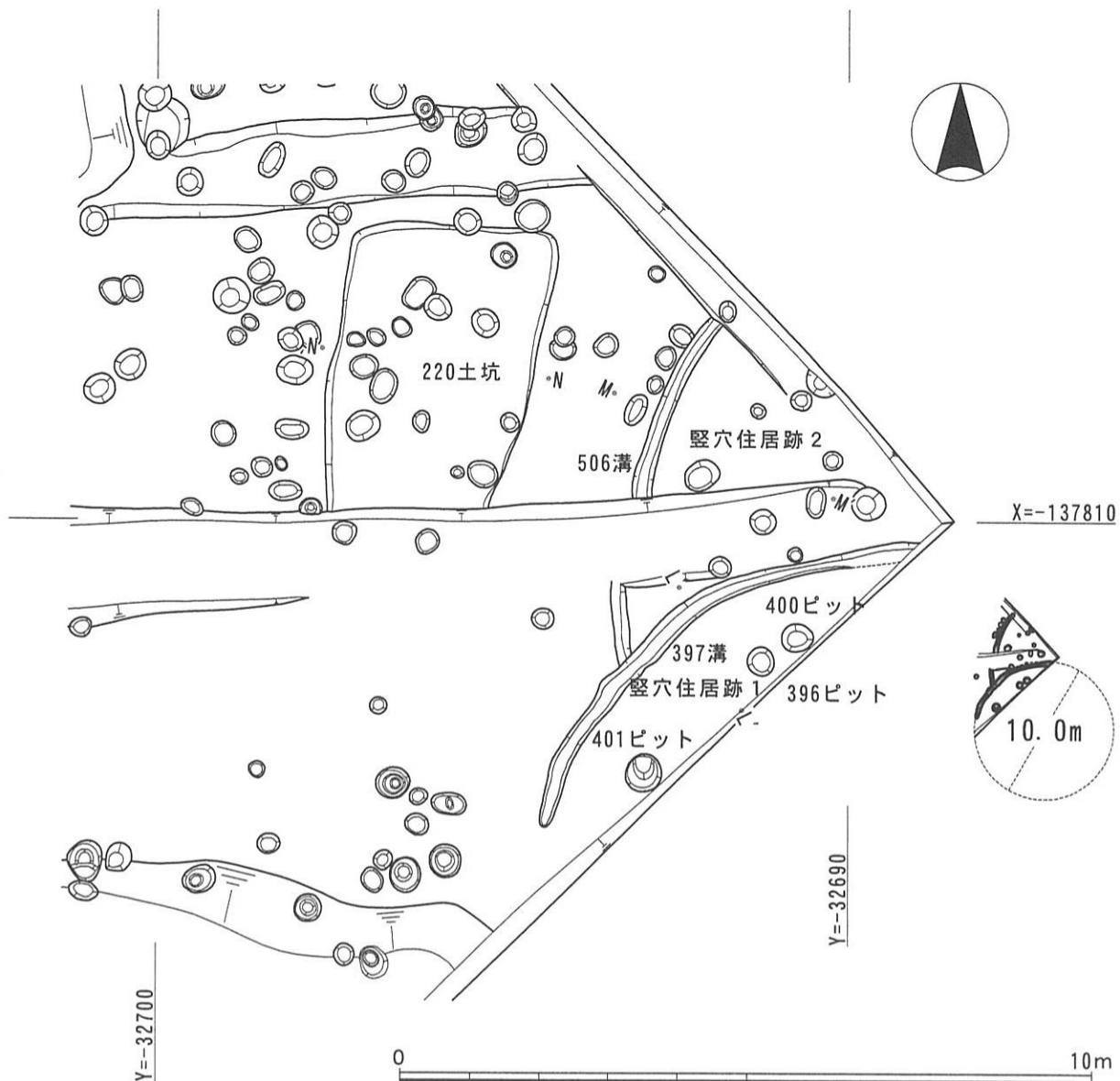


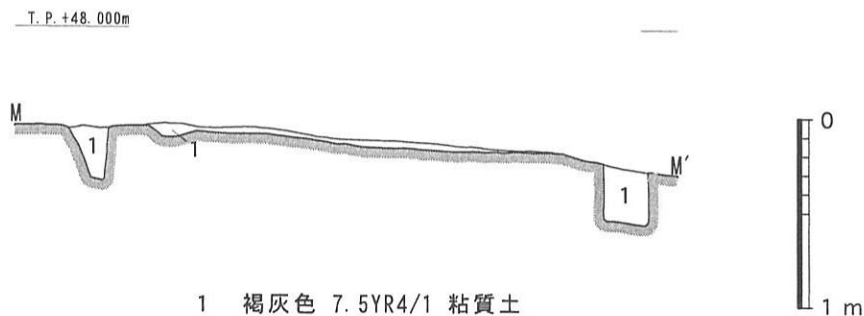
図21 2区 竪穴住居跡1・2 220土坑他 平面図

竪穴住居跡2 (506溝) (図9、21、22・図版5、6)

竪穴住居跡1の北側で検出した。壁溝と考えられる弧状の溝で幅約0.2~0.25m・深さ0.02~0.2mである。埋土は褐灰色粘質土で、同一土層が溝の内側に部分的に堆積している。地山面は東に向かってわずかに下がる。

直径10m以上に復元され、竪穴住居跡1よりやや大きい竪穴住居跡となるものと思われる。竪穴住居跡1に切られている。

出土遺物が細片のため明らかではないが弥生時代中期の遺構と思われる。



1 褐灰色 7.5YR4/1 粘質土

図22 2区 竪穴住居跡2 断面図



220土坑 (図9、21、23・写真図版5、6)

2区東側、住居跡2の西側で検出した。一部が攪乱に切られているが、やや変形した長方形の土坑である。残存部分で南北4.0m・東西2.3~3.0m、深さ0.1m弱である。方形の竪穴住居の可能性もあるが削平を受けており、また、地山の礫層部分に穿たれているため壁溝、床面等の確認ができなかった。

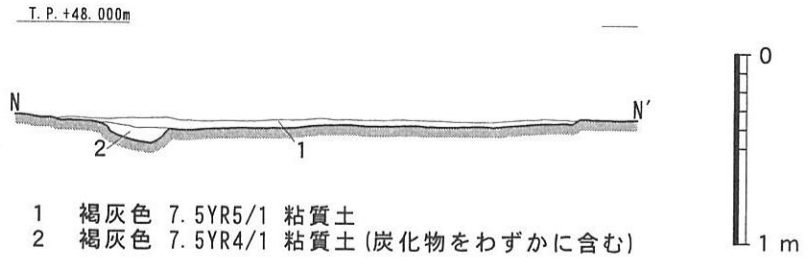


図23 2区 220土坑 断面図

埋土からは弥生土器の甕等が出土した。

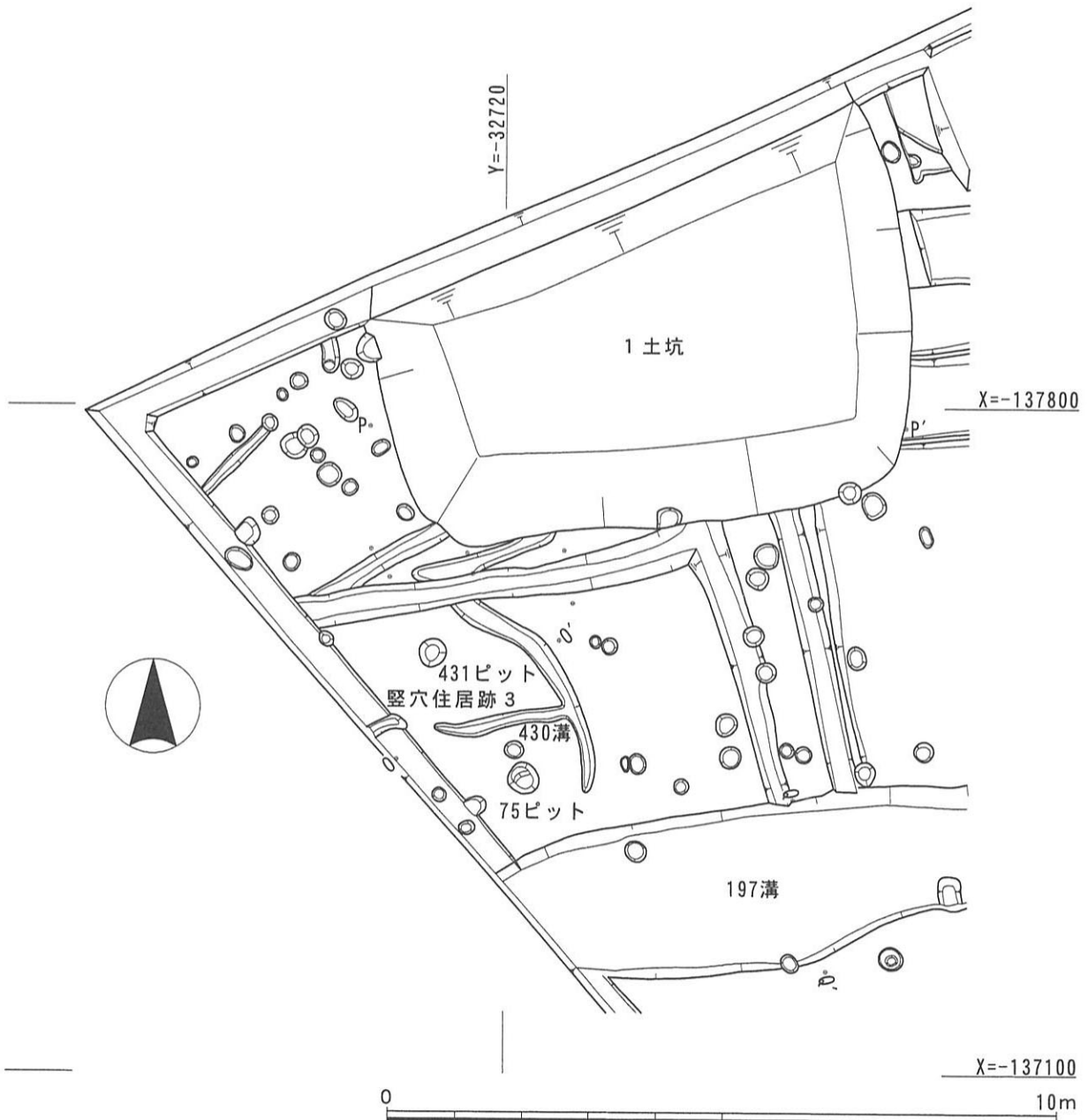


図24 2区 竪穴住居跡3 197溝 1土坑他 平面図

竪穴住居跡 3 (430溝・75ピット・431ピット) (図9、24、25・写真図版5、6)

2区西隅付近で検出した。430溝は幅約0.2~0.25m・深さ0.02~0.2mで壁溝と思われる。住居跡中心から延びる排水溝と思われる溝が壁溝と連続する。

壁溝と溝の内側の床面的一部分には褐灰色粘質土が薄く覆っていたが竪穴の本来の埋土であるかは不明である。

床面で検出した竪穴住居跡の柱穴と思われる75・431ピットはいずれも直径0.4m前後・深さ0.6~0.7mのしっかりとしたピットで、埋土は黒褐色粘質土である。

残存している壁溝の弧から復元して直径6m程度の円形竪穴住居と推測される。

出土遺物は細片でかつ劣化が進んでいるため明らかではないが、弥生時代中期の土器であろう。

この時期の遺構と思われる。

140ピット (図9・写真図版5、6)

2区北隅で検出したピット群の1基で、板状の根石をもつ。周辺のピットも同様の径・深さで建物の一部になると思われる。

時期は不明であるが、付近のピットからは土師器・瓦器の細片がわずかに出土している。中世の遺構と思われる。

148溝・149溝 (図9・写真図版5)

2区北側を東西方向に走る溝で、幅1.1m・深さ0.1m前後を測る。

近世以降の溝で耕作に伴う区画あるいは畝溝と思われる。

197溝 (図9、24、26・写真図版5)

2区中央を東西方向に走る溝で、幅1.3~2.5m・深さ0.1~0.2mを測る。

148・149溝と同様、耕作に伴う区画溝と思われる。溝を境に北側に比べ南側がわずかに低い。

近世以降の遺構である。

388土坑 (図9・写真図版5)

調査区南西壁際で検出した。直径0.9m・深さ0.8mの土坑で、1区の608土坑同様、素掘の井戸または水溜と思われる。

近世以降の遺構である。

1土坑 (図9、24、27・写真図版5)

2区北西端で検出した。検出部分で推測すると一辺7.7mほどの隅丸方形の大型土坑で調査区外の市道部分に広がる。深さは1.4m以上である。埋土は周辺の地山層に似た砂礫で、短期間に埋めたような堆積状況である。土坑が掘削されている部分は比較的均質な粘土層であることから、粘土採取坑である可能性が高い。

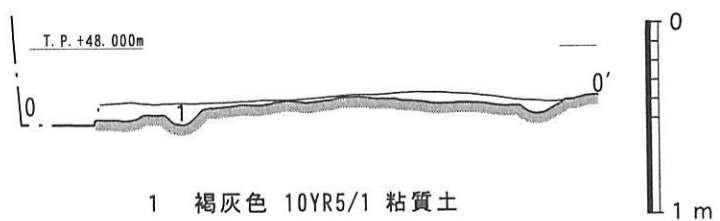


図25 2区 竪穴住居跡 3 断面図

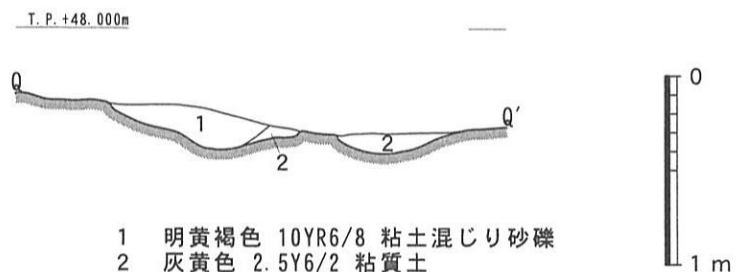


図26 2区 197溝 断面図

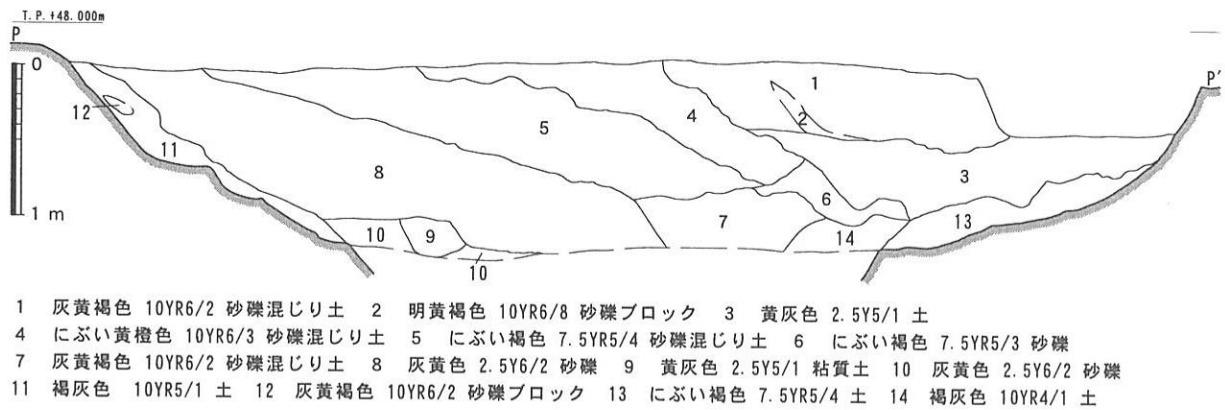


図27 2区 1土坑 断面図

ピット群 (図9、21・写真図版5、6)

約400基のピットを検出した。直径0.2～0.4mのものがほとんどである。1区と同様に埋土により弥生時代・中世・近世の3時期に分類できるが、調査区東半に集中するピットは弥生時代が中心である。これらは埋土がよく締まった黒褐色粘質土で、深さが検出長で0.5～0.7m程あるのが特徴である。建物などに復元できるものはなかったが、削平された竪穴住居跡の残欠の可能性は高い。

また、調査区南端で谷の肩を検出した。残土・廃材などで埋め立てられており、今回詳細な調査を行えなかった。埋戻時に機械力による深掘りを行った結果、T.P.+約44.0m～44.5m付近で地山と思われる比較的平坦な面を確認した。

今回調査区の平均的な遺構面高からは4mほど低い。しかし、調査区の南側、丘陵緩斜面に立地する隣接する大尾遺跡では、財団法人大阪府文化財センターが平成13(2001)・平成15(2003)年度に実施した第二京阪道路建設に係る調査でT.P.+約44.0m付近を遺構面とし、弥生時代中期の方形周溝墓30基以上、竪穴住居跡などが検出されている。

#### 第4節 遺物

今回の調査で出土した遺物は、弥生土器・土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器・瓦・石器等である。その時期は弥生時代から現代に至る。出土量は全体でコンテナ10箱程度であった。

出土した主な遺物は遺構ごとに以下のとおり。

##### 2土坑 (図28・写真図版7)

1は鉢あるいは台付鉢の口縁である。口縁端部外側に傾斜した櫛描列点帯を施す。2も鉢あるいは台付鉢の体部である。折り返すタイプの口縁を欠損している。幅の違う櫛描列点文帯を2段に施す。3～7は甕である。4は中型の甕で口縁端部上端に刻目をもつ。5も中型の甕で体部にヘラミガキを施す。6・7は小型の甕である。8は把手付の鉢である。復元口径14.5cm、器高15.7cmの縦長な、やや大きめのカップ状の鉢の口縁から体部中程に手捏の半円形把手が片方に付く。

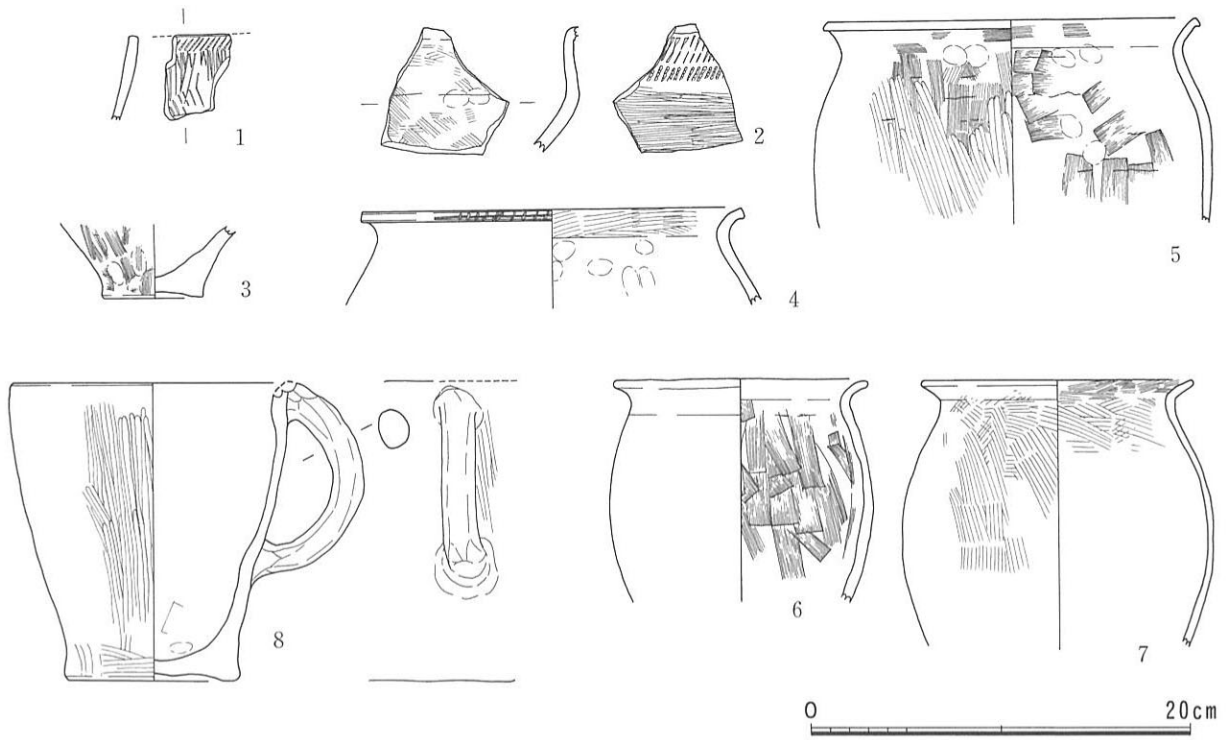


图28 1区 2土坑 出土遺物

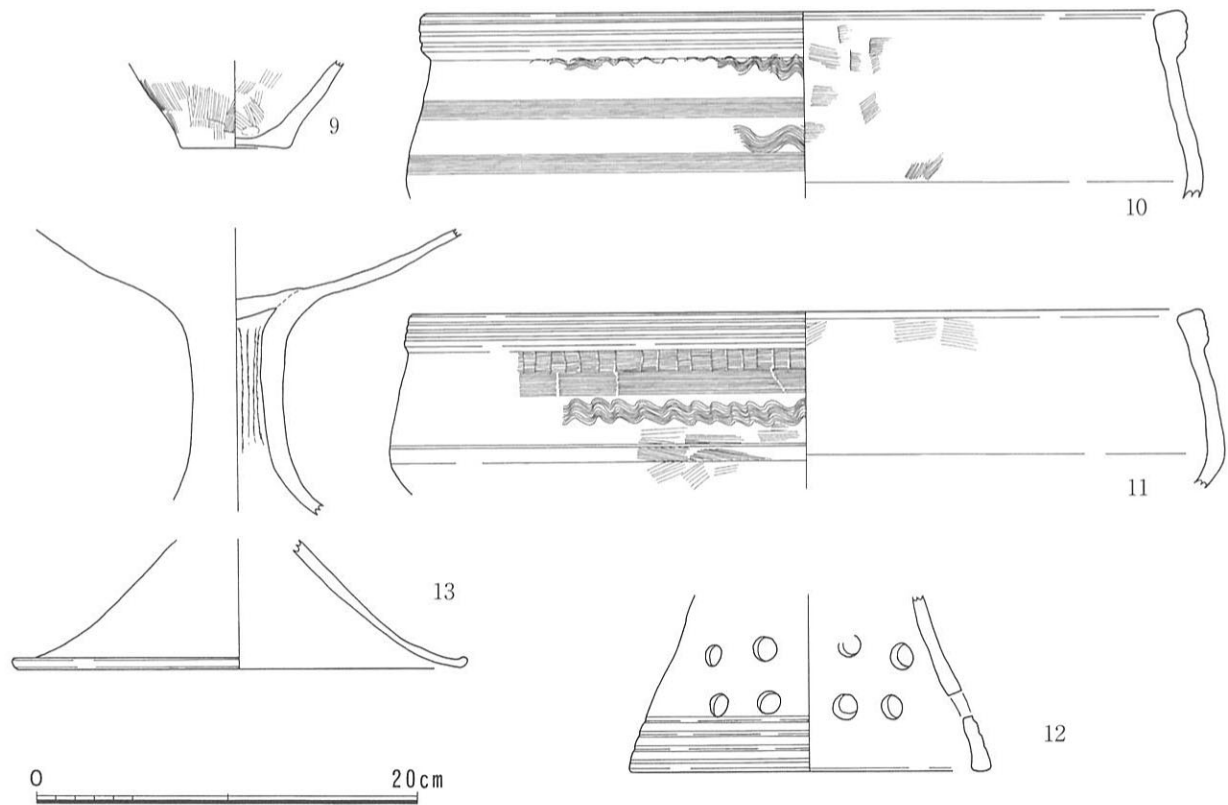


图29 1区 周溝墓1 出土遺物

周溝墓1 (513溝) (図29・写真図版8、9)

9は弥生土器甕または壺の底部である。10は大型の鉢で、段状に肥厚させた口縁に3条の細い凹線文を施す。また、体部には10条単位の同一原体と思われる櫛描波状文と直線文を交互に施す。復元口径39.6cm。11も大型の鉢で、段状に肥厚させた口縁に3条の細い凹線文を施す。体部には上から順に13条単位の櫛描の簾状文、簾状文と同じ原体と思われる直線文、10条単位の波状文の順に施す。復元口径42.4cm。12は台付鉢の脚台部で10・11のいずれかと同一個体かもしれない。径1cm強の円孔を2～3cm間隔で多数穿つ。裾部にはやや太い凹線文を4条施す。13は高坏の鉢から脚部で口縁は欠損する。

16溝 (図30・写真図版9)

14は弥生土器壺の底部である。復元底部径10.4cm。

古墳1 (3溝) (図31・写真図版10)

15は土師器甕口縁部である。粗い胎土をもつ。復元口径28.2cm。

16は須恵器高坏である。長脚二段透かしの脚部上半部分。

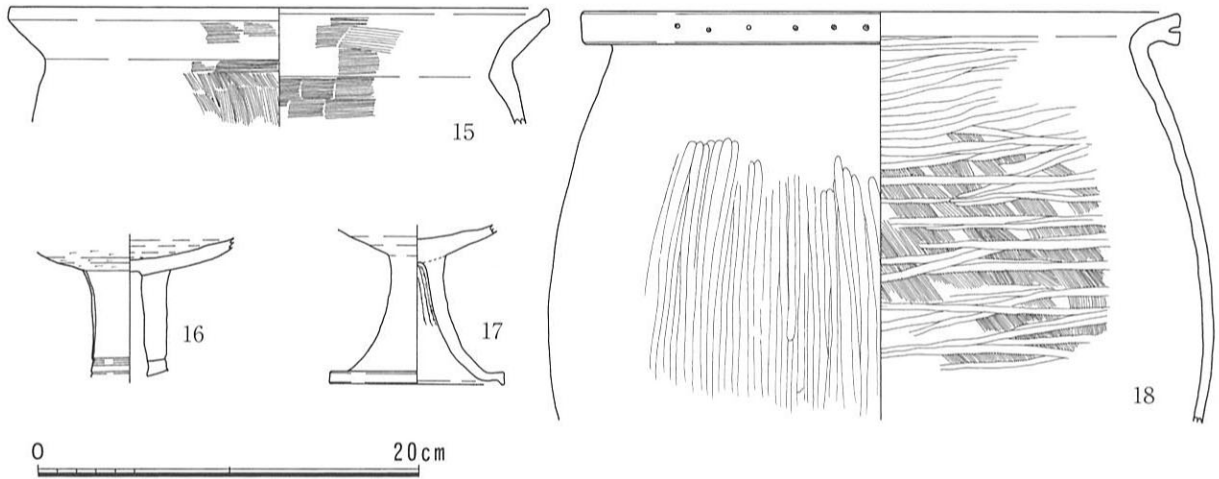
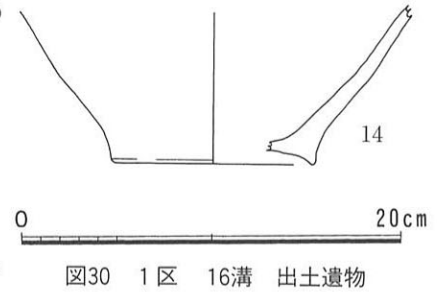


図31 1区 古墳1・2 出土遺物

古墳2 (4溝) (図31・写真図版10)

17は須恵器高坏で、坏部は欠損している。復元底部径 8.4cm。18は弥生土器の大型甕で、やや垂れ下げた口縁外面に刺突孔が2cm前後の間隔で施されている。体部外面は丁寧なヘラミガキ調整、内面ハケの後横方向の粗いヘラミガキを行う。復元口径31.8cm。

511溝 (図32・写真図版11)

19は弥生土器甕の底部である。底面に篋描沈線による葉脈様の文様を施す。底部径 6.0cm。20は土師器甕である。器壁は厚く胎土は粗い。復元口径 13.2cm。

220土坑 (図33・写真図版9)

21は大型の甕の口縁部である。復元口径 35.4cm。22は甕の底部である。底部径 4.3cm。21と22は色調、胎土から同一個体と思われる。

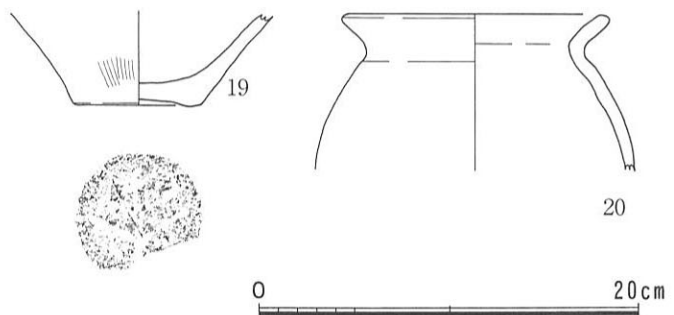


図32 1区 511溝 出土遺物

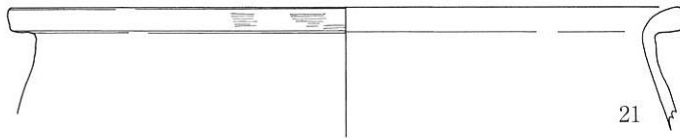


図33 2区 220土坑 出土遺物

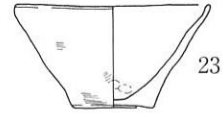


図34 2区 竪穴住居跡1 出土遺物

竪穴住居跡1 (397溝) (図34・写真図版9)

23は小型の鉢で口径10.2cm、底部径5.4cm。

石器 (図35、36・写真図版12)

製品・未製品は8点出土した。24~27は旧耕土、28は75ピット、29は周溝墓1、30・31は2土坑からの出土である。24は柱状片刃石斧である。側面はきれいに面取りされており、断面は、半円形を呈する。素材は硬質砂岩で、残存長6.4cm、幅2.55cm、厚さ2.2cmを測る。25は凸基無茎式の石鏃である。両側縁側から調整剥離を施している。素材はサヌカイトで、長さ4.3cm、幅1.5cm、厚さ0.5cm、重さ2.25gを測る。26は凸基無茎式の石鏃である。薄い剥片を使用しており、両側縁側から調整剥離を施しているが、表面裏面とも素材の剥離面を残している。素材はサヌカイトで、長さ3.3cm、幅1.1cm、厚さ0.3cm、重さ1.30gを測る。27は凸基無茎式の石鏃である。先端部及び基部を欠損している。両側縁側から調整剥

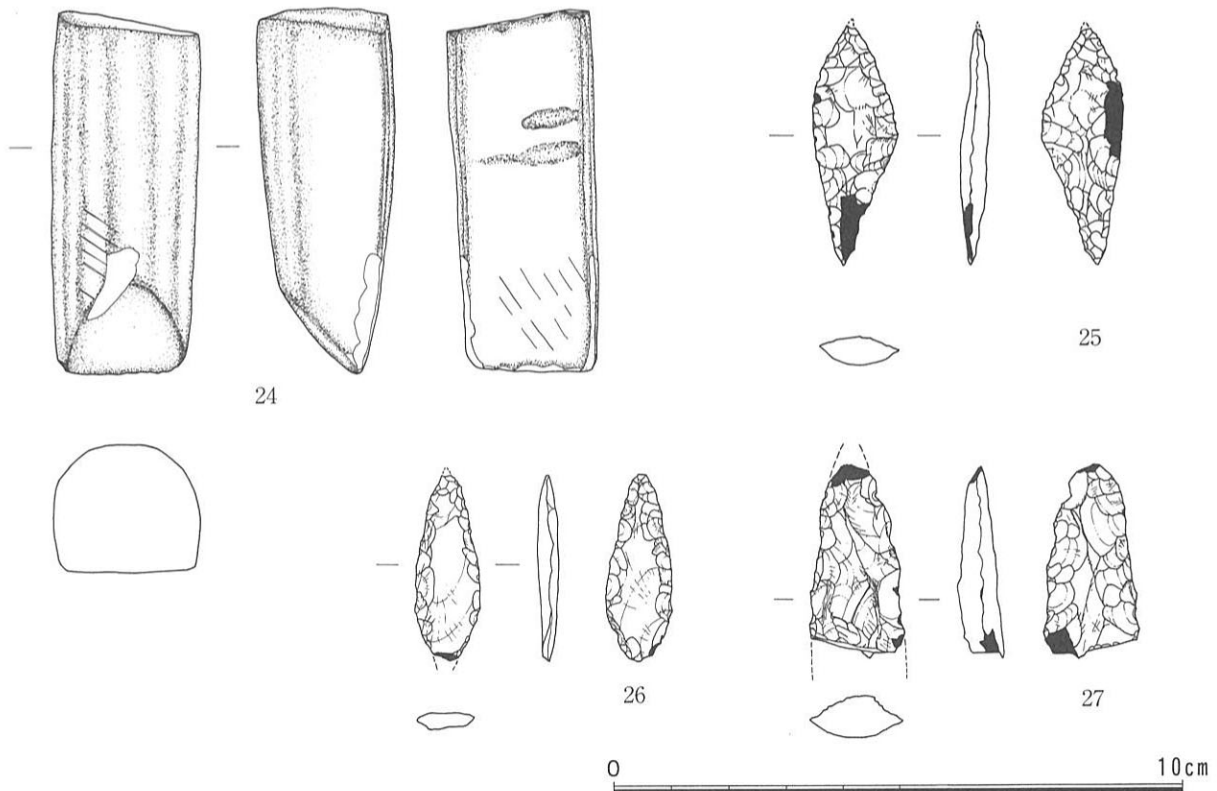


図35 出土遺物 石器 (1)

離を施しているが、表面裏面とも素材面を残している。素材はサヌカイトで、残存長 3.4cm、幅1.66cm、厚さ 0.7cm、重さ3.94 gを測る。28は石鏃の未製品と思われる。先端部を欠損している。素材はサヌカイトで、残存長 4.5cm、幅 2.5cm、厚さ1.15cm、重さ 14.56 gを測る。29は石槍の未製品である。正面右側縁部は刃部を作成ようとする調整剥離が施されるが、左側縁部は自然面を残している。製作途中で折れたため放棄したものと思われる。素材はサヌカイトで、残存長 6.0cm、幅 3.4cm、厚さ1.30cmを測る。30はスクレーパーである。横長剥片を使用し、主用剥離面側から調整剥離を施し、刃部を作成している。素材はサヌカイトで、長さ 5.8cm、幅 3.4cm、厚さ 1.4cm、重さ 23.43 gを測る。31は2次加工のある剥片である。横長剥片の打面側を折り取り、剥片先端部に一部2次加工を施している。素材はサヌカイトで、長さ 2.7cm、幅 4.4cm、厚さ 0.9cm、重さ6.40 gを測る。

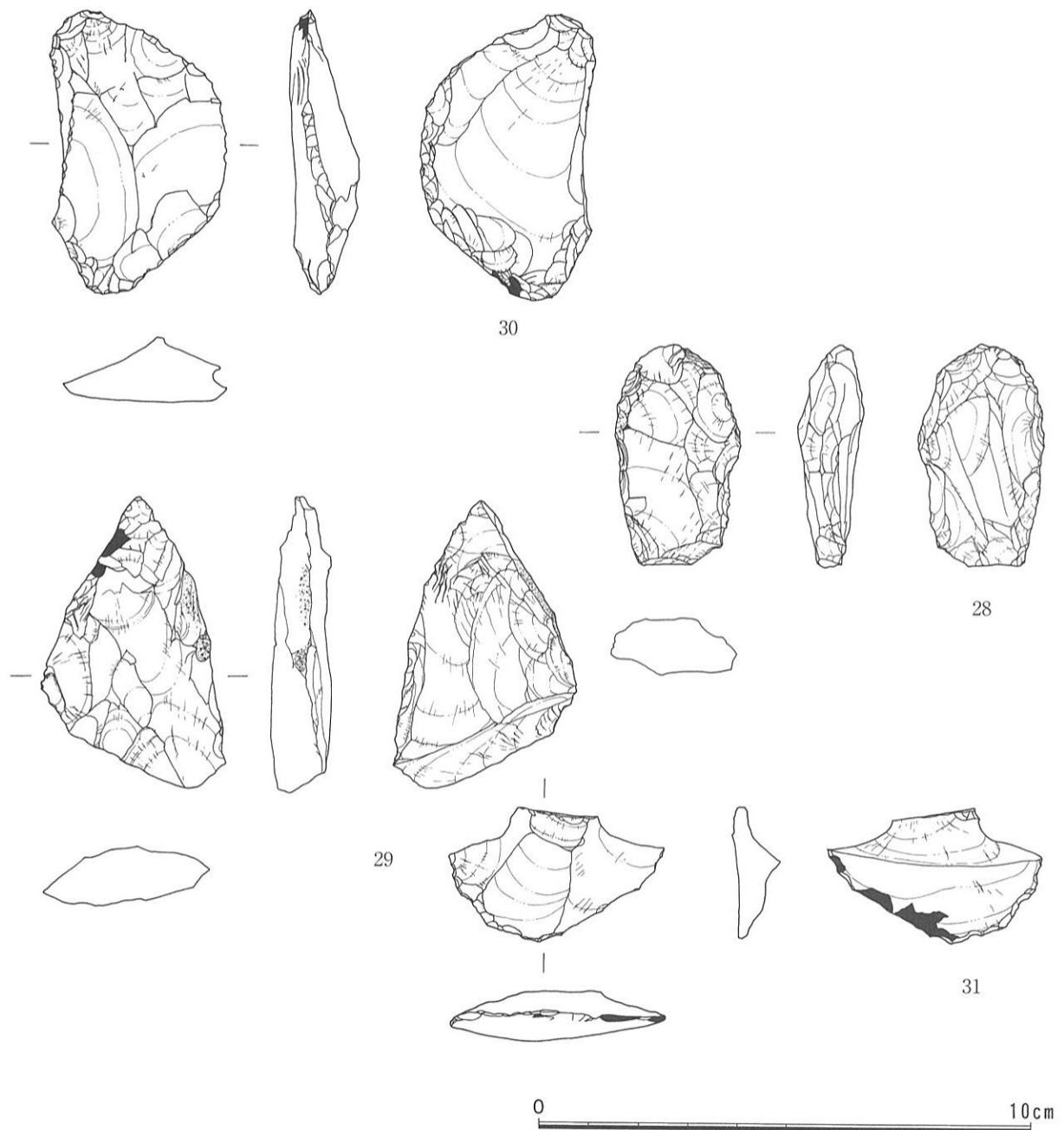


図36 出土遺物 石器 (2)

## 第4章 総括

今回発掘調査を実施した太秦遺跡・太秦古墳群は大阪府北河内地域の代表的遺跡の一つである。「太秦遺跡」としては弥生時代中期に現れる高地性集落として、また「太秦古墳群」としては神武東征伝承をもつ太秦高塚古墳（トノ山古墳）や秦氏に関わる伝承、また豊富な出土・採集品などから斯界では早くから注目されていた。この地に第二京阪道路および大阪北道路建設が計画され、財団法人大阪府文化財センターが平成13（2001）年に実施した「太秦古墳群」の調査を皮切りに数々の発掘調査を実施した。これらの成果は寝屋川市東部丘陵上に展開するこの太秦遺跡・太秦古墳群に次々と新知見を与えることでもあった。

今回調査地点は同センターが実施した第二京阪道路および大阪北道路建設に係る発掘調査のうち、平成13・14年に実施した太秦遺跡・太秦古墳群と、同じく平成13・14年に実施した大尾遺跡の調査地点の中間に当たる。これらの太秦遺跡・太秦古墳群の発掘調査では40棟近くの弥生時代中期の竪穴住居跡・「尾支群」と命名された方墳を主とした25基もの小規模古墳の群集・古墳時代後期から古代の竪穴住居跡を5棟、掘立柱建物を11棟・土壙墓・中世から近世と考えられる大溝など多くの遺構を検出している。同じく大尾遺跡の調査では、30基以上の方形周溝墓群・弥生時代中期の竪穴住居・7世紀代を中心とした竪穴住居跡や掘立柱建物など、弥生時代から中世に至る多くの遺構を検出している。

今回の調査においても、太秦遺跡・太秦古墳群の様相の新たな知見を得ることができた。

まず、新たに弥生時代中期の竪穴住居跡3棟を検出した。これまでの調査にあわせて、「太秦遺跡」の住居跡群がさらに西側に拡がることが判明した。これまでに確認された「太秦遺跡」の弥生時代の遺構の広がりや位置する標高でみると、今回調査地では標高48m弱のほぼ丘陵尾根頂上、平成13・14年の太秦遺跡・太秦古墳群の調査の弥生時代中期の住居跡群・7世紀を中心とした竪穴住居跡・掘立柱建物群が重複する遺構面は標高43.5～47.8mの南向きの緩斜面テラスに存在する。同じく平成13・14年の「大尾遺跡」の調査では、標高43～45m地点の南向きの緩斜面テラスほぼ全域で方形周溝墓を中心とした遺構を検出している。これらの成果から、当該地域の丘陵平坦部から南側に拡がる緩斜面上には、ほぼ全面的に弥生時代中期の遺構が分布しているものと思われる。当地は早くから開発が進み、丘陵端に存在する葉脈状の谷地形を埋め立て宅地化されているが、谷に併せて埋め立てられた緩斜面上には多くの遺構が存在するものと思われる。今回調査対象外であった第二京阪道路および大阪北道路用地の間まではおそらく弥生時代の遺構面が続き「大尾遺跡」に連なり、「太秦遺跡」と「大尾遺跡」は一つになるものと予想される。今後、注意が必要である。

また、「太秦古墳群」としては、今回6世紀の古墳2基を検出した。先に確認された「尾支群」と比べやや時代が下り、別のグループに属すると考えられる。しかし2基は近接しており、「尾支群」の古墳の密度から考えても調査区外にも同様の古墳が存在する可能性は高い。これまでの調査で尾根の南側斜面には古墳が認められなかったことから、その分布は尾根頂上に展開するものと予想される。また太秦古墳群の盟主墳とされる太秦高塚古墳（トノ山古墳）までは直線にしてわずか300m弱、「尾支群」までは300m強の距離にある。立地的には同じ尾根上にあり、立地する標高もあまり変わらない。今後の調査でさらに太秦高塚古墳（トノ山古墳）や「尾支群」との間を埋める成果が得られれば「太秦古墳群」の構成を明らかにできるものと期待される。



# 写 真 图 版

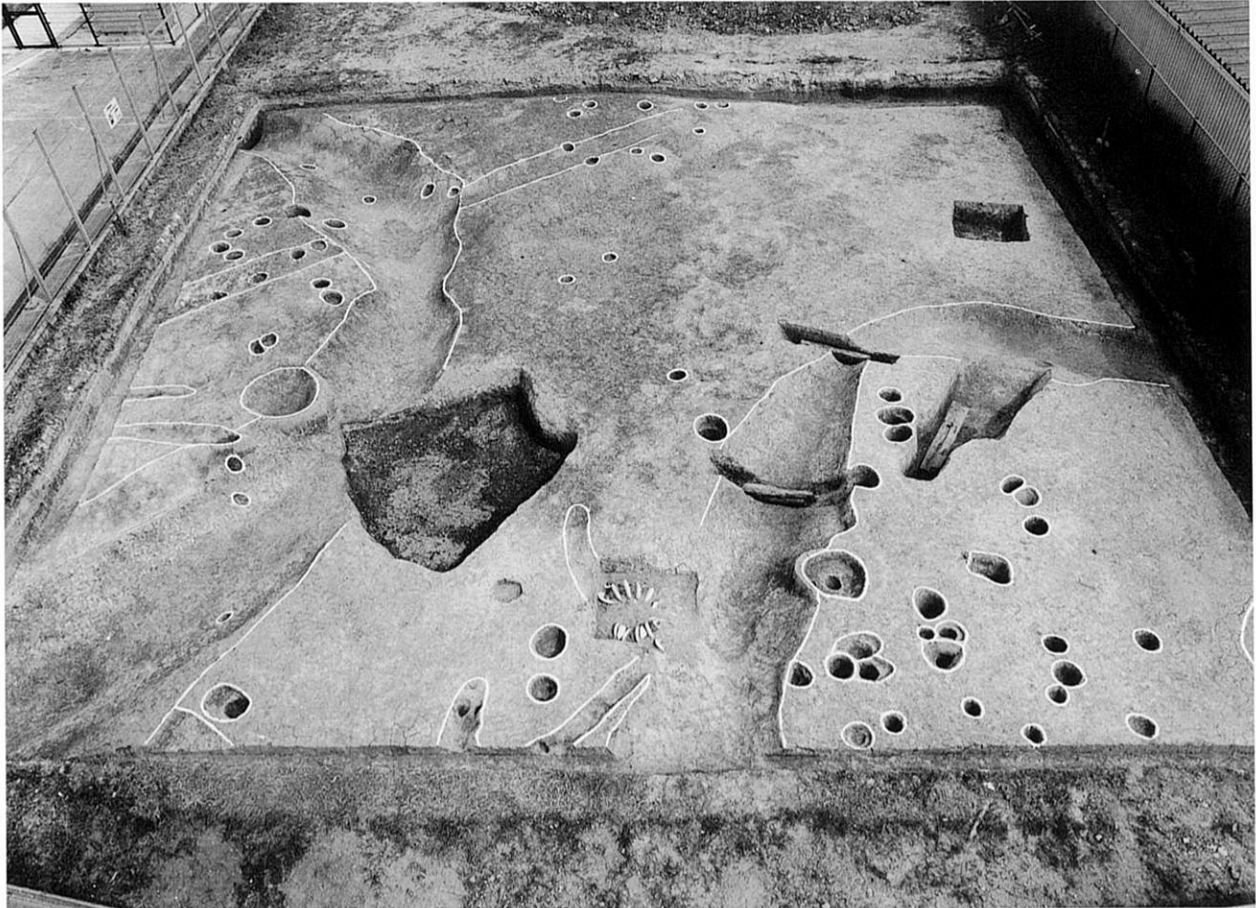


1. 調査地周辺航空写真（南から）



2. 調査区航空写真（南から）

写真図版 2



1. 1-1区全景（北西から）



2. 1-1区全景（南東から）



1. 古墳1 (3溝)

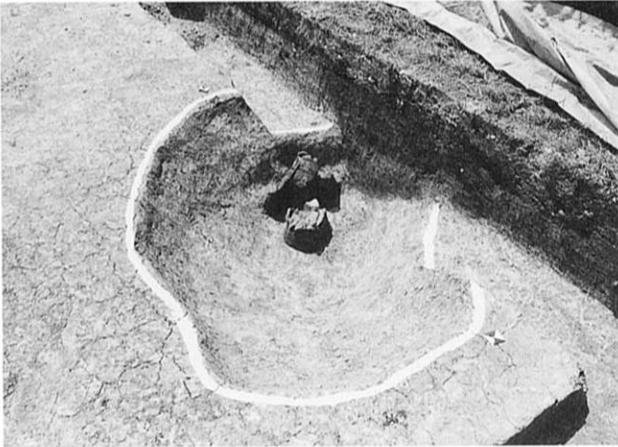


2. 古墳2 (4溝)・2土坑

写真図版 4



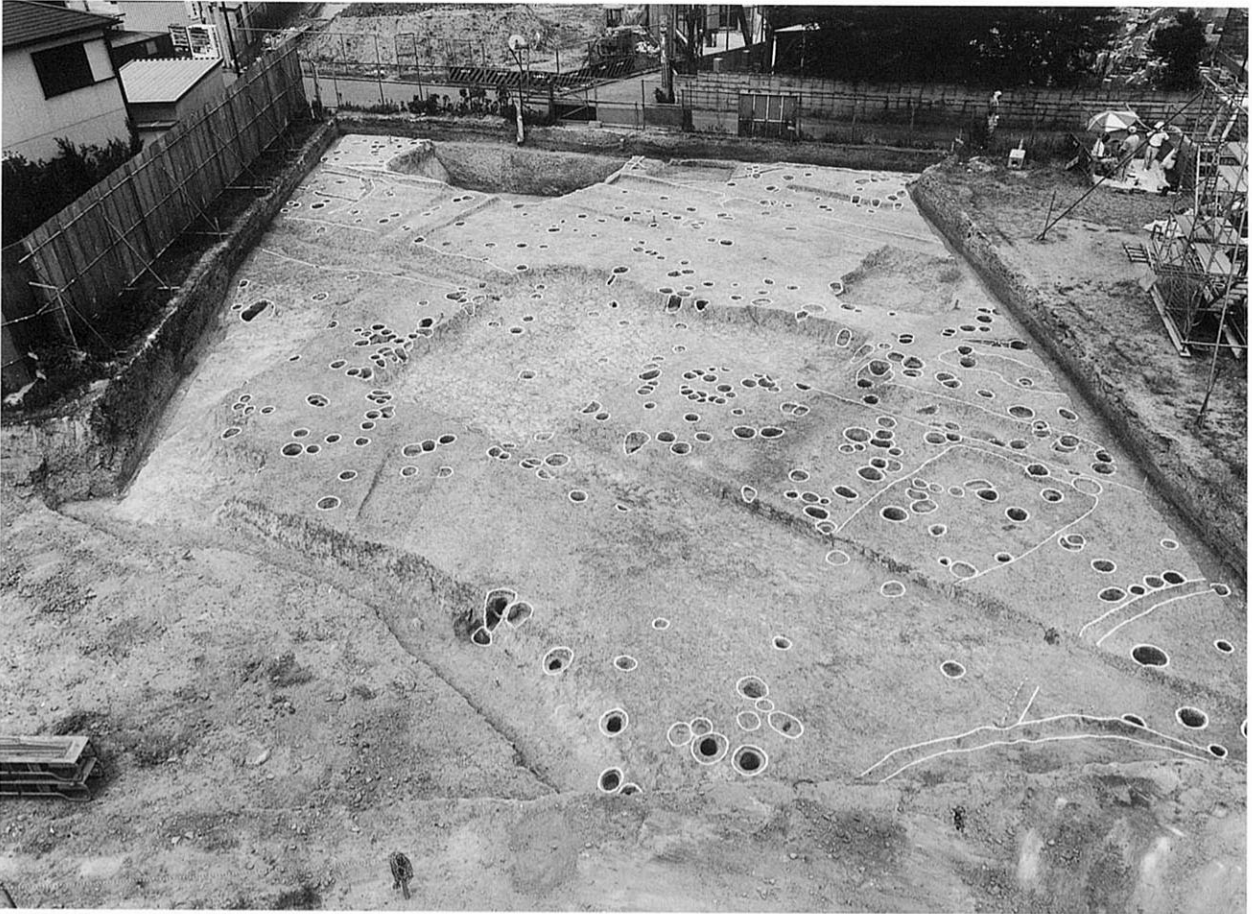
1. 1-2区全景 (北西から)



2. 2. 2土坑  
3. 古墳2周溝断面



4. 古墳1周溝断面1  
5. 古墳1周溝断面2



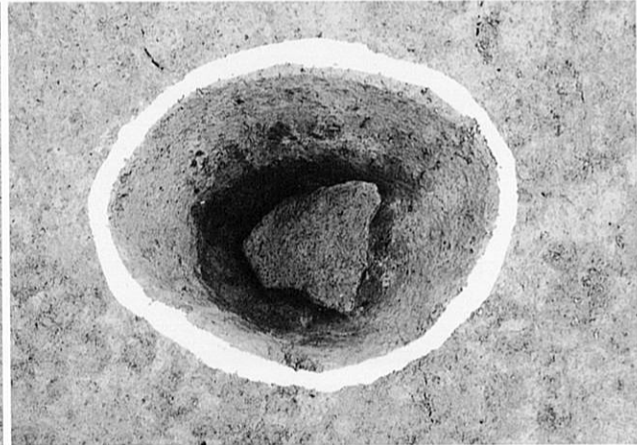
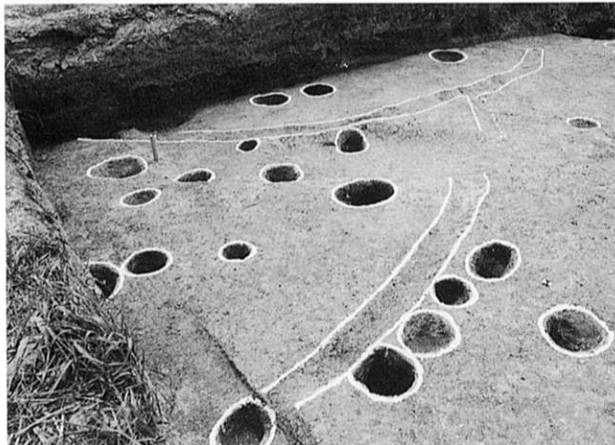
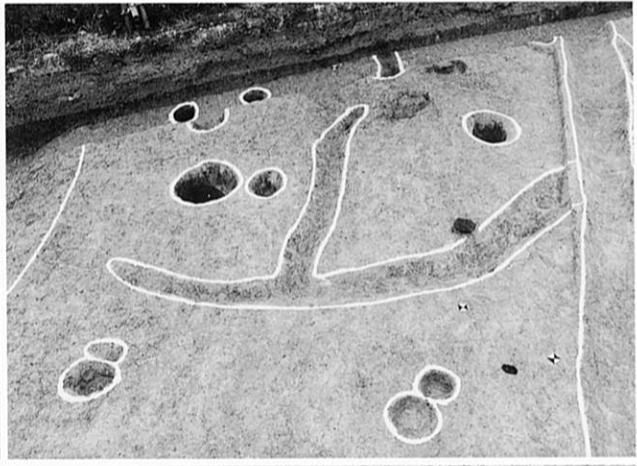
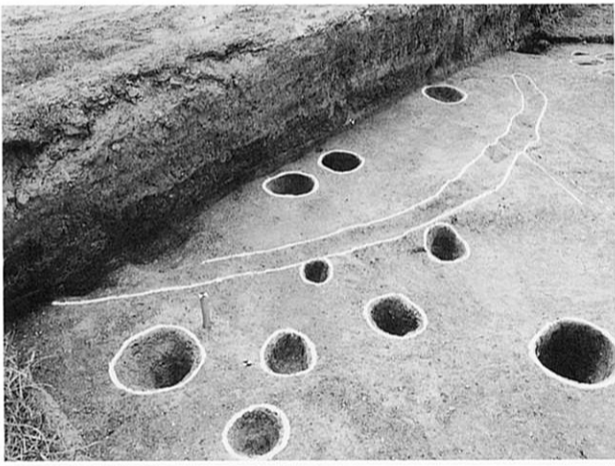
1. 2区全景 (南東から)



2. 2区北半 (東から)



1. 2区南半 (北から)



2. 竪穴住居跡 1  
3. 竪穴住居跡 1・2

4. 竪穴住居跡 3  
5. 140ピット



8



5



7



4



2



6

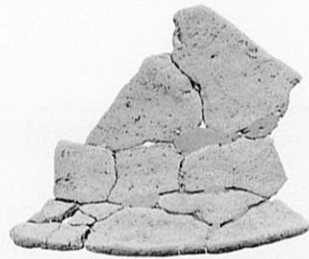


3

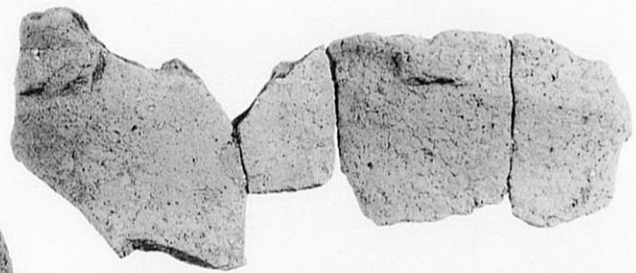




12



13



周溝墓1 513溝



10



11



9



14



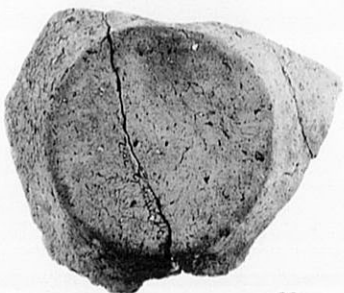
23



竖穴住居跡1 (397溝)



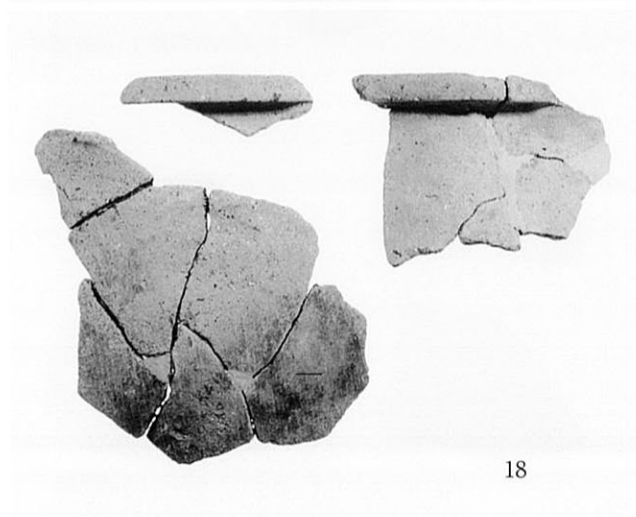
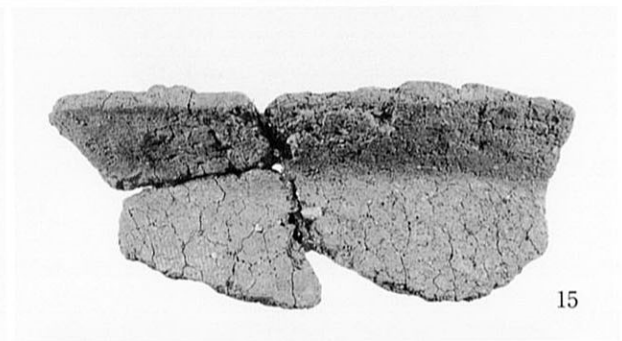
21

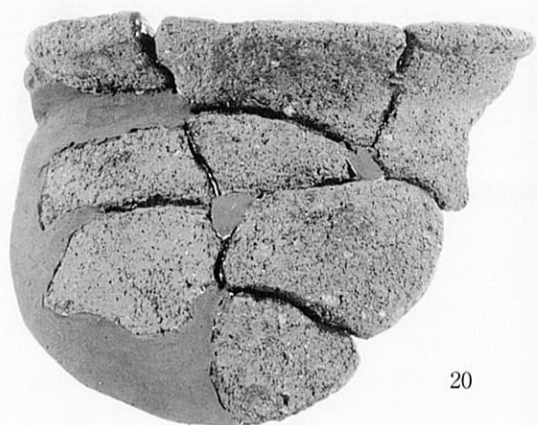


22



220土坑





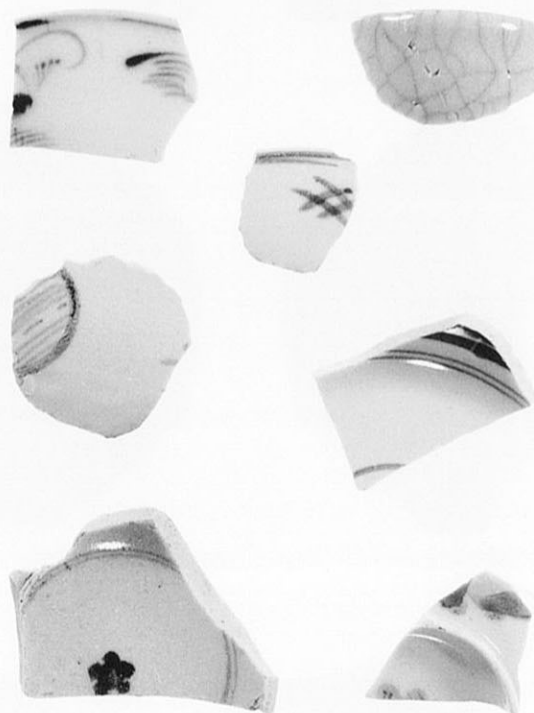
20



511溝

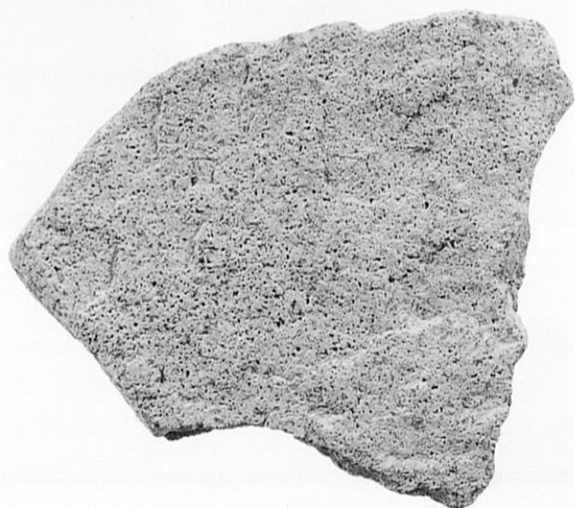


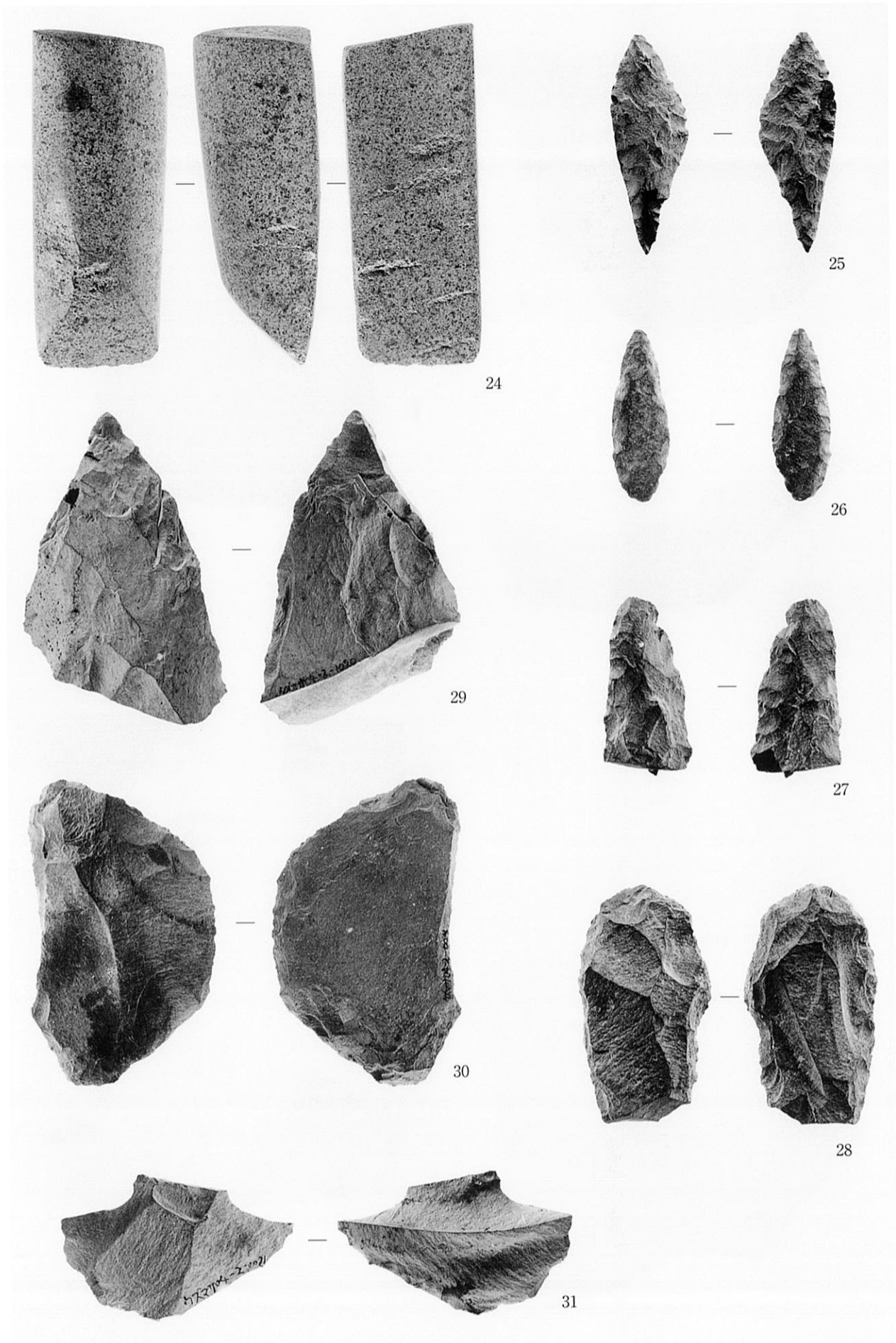
19



1土坑

140ピット・根石





報告書抄録

ふりがな	うずまさいせき・うずまきこふんぐん I							
書名	太秦遺跡・太秦古墳群 I							
副書名	主要地方道枚方富田林泉佐野線（都市計画道路国守黒原線）道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	（財）大阪府文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第126集							
編著者名	大樂康宏							
編集機関	財団法人 大阪府文化財センター							
所在地	〒590-0105 大阪府堺市竹城台3丁21番4号							
発行年月日	2005年2月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
うずまさいせき 太秦遺跡・ うずまきこふんぐん 太秦古墳群	おおさかふねやがわし 大阪府寝屋川市 くにもりちょう 国守町	27215	3	34° 45' 15"	135° 38' 43"	2004028 ～ 20040820	1,275 m <sup>2</sup>	道路建設
所収遺跡名	遺跡種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
太秦遺跡・ 太秦古墳群	集落 古墳 散布地	縄文 ～弥生 古墳時代 ～中世	竪穴住居跡3棟 方形周溝墓1基 古墳2基 ピット群	弥生土器・須恵器・ 土師器・石器				

（財）大阪府文化財センター調査報告書 第126集

太秦遺跡・太秦古墳群 I

主要地方道枚方富田林泉佐野線（都市計画道路国守黒原線）  
道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

発行年月日／2005年2月28日

編集・発行／財団法人 大阪府文化財センター  
大阪府堺市竹城台3丁21番4号

印刷・製本／株式会社 中島弘文堂印刷所  
大阪府大阪市東成区深江南2丁目6番8号